長崎鼻から見た開聞岳

終戦間際、近くの山川に第５３震洋隊の基地が設けられた。

特攻会報

令和７年８月

第１５６号

公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会

編集人　金子敬志

発行人　石井光政

印刷所　株式会社 SGネクストホールディングス

目次

暑中お見舞い申し上げます・・・

署中お見舞い申し上げます

公益社団法人隊友会
会　長　折木良一
理事長　岩﨑　茂
常務理事　徳地秀士
常務理事　岩田清文
常務理事　山村　浩
事務局長　藤井貞文

公益財団法人陸修偕行社
会　長　森　勉
副理事長　岩田清文
専務理事　内田益次郎
事務局長　本庄俊弘

公益財団法人水交会
会　長　杉本正彦
副会長　佐賀幾雄
理事長　河野克俊
専務理事　村川　豊
事務局長　徳丸伸一

航空自衛隊退職者団体つばさ会
会　長　杉山良行
副会長　丸茂吉成
副会長　片山隆仁
副会長　藤田信之
副会長　谷井修平
副会長　福永充史
専務理事　荒木文博

公益財団法人大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会
会　長　安倍昭惠
理事長　山下輝男
副理事長　石井光政
専務理事　伊藤　隆
常務理事　國澤輝生

東郷神社
宮　司　福田　勉

東郷会
会　長　伊藤康成
副会長兼理事長　永田美喜夫
編集長　岩田高明
事務局長　足立晴夫

公益財団法人千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会
会　長　鈴木俊一
副会長　羽毛田信吾
同　小池百合子
同　千本倖生
理事長　保松秀次郎
常務理事　中村　勤
同　杉本順則
同　槻木新二
同　住吉一俊

公益財団法人特攻隊戦没者慰霊顕彰会
会　長　藤田幸生
理事長　岩﨑　茂
副理事長　岡部俊哉
専務理事兼事務局長　石井光政
理　事　臼田智子
鮒田英一
大穂園井
久納雄二
監　事　宮本雅史
中井真人
羽渕徹也

「巻頭言」

公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会
副理事長　岡部　俊哉

本年は終戦80年の節目の年であるとともに、昭和60年８月12日の日本航空１２３便の墜落事故から40年目でもあります。

この日航１２３便の墜落事故については、その原因等について様々な憶測が出回っておりましたが、その中でとんでもない陰謀論を説いた書籍が数多く出版されております。日航１２３便は自衛隊が訓練あるいは試験中のミサイル等で撃墜してしまった事件であり、墜落現場の特定を意図的に遅らせ、その間に証拠隠滅のために火炎放射器で事故現場を焼却した等々、政府、自衛隊・自衛官や事故関係者の名誉毀損の類いは勿論、記述するのも恥ずかしいような荒唐無稽な内容であります。

よってさして気にも留めてはいなかったのですが、これら書籍の一部がノンフィクションとして全国学校図書館協議会選定図書に選定されていたという恐ろしい事実、またネットの世界でも陰謀論が飛び交っており、その説を信ずる人々がかなり存在することを最近知りました。

加えて、昨年の御巣鷹山慰霊登山（個人的に毎年８月実施）において、登山者が必ず目にする場所に一昨年まではなかった、写真付きの慰霊碑が建立されたことに気付きました。そこには、家族や子供さんの遺影の下に、「※Ｎ総理・自衛隊が　意図的に殺害した　乗客・犠牲者」の文字が書かれていたのです。事故の犠牲者を慰霊する園に全く似つかわしくないその言葉に、かつて現場に派遣され生存者救出、遺体後送等の活動に従事した者の一人として、大変な衝撃を受け思わず立ち竦んだのでした。

40年を経て日航１２３便の事故を知らない国民が増えている中、事故を風化させないことは極めて重要であります。一方でその名目の元、白紙の子供たちを狙って虚偽と悪意に満ちたフィクションを学校の図書館において推薦図書として読ませる、若者や大人に対しても同書やＳＮＳを通じて陰謀説を刷り込む、更にはこれらの説に反論がないのは真実である証拠とも嘯く。これらは明らかに日本国や自衛隊を貶める情報戦・認知戦であり、従軍慰安婦問題などの様に放置しておくと取り返しのつかない事態に発展する恐れがある一大事であります。

戦後80年の節目の年として、政府は有識者会議を設けて戦争検証をするそうです。日本国民として大東亜戦争戦没者に対する慰霊顕彰についても、当然振起の機会とすべきであります。

更には40年を迎える日本航空１２３便の墜落事故の尊い犠牲者の方々に慰霊の誠を捧げるとともに、近年一連の発生が気になる航空機事故の絶無を改めて誓う機会にすべきであります。

一方で我々は、平素から国家や組織・個人を対象とした妨害、弱体化工作等があらゆる機会を通じて諮られている事実を直視しなければなりません。その上で大量の情報に溢れ、即拡散する現代社会において、組織は無論のこと、個人としても真実を見極め、偽情報に惑わされず、支配・洗脳されない様に、常に意を用い、眼識を磨き、点検し周知していくことが、これら認知領域の戦い（敢えて「戦い」と言います）を生き抜くにあたり、肝要なことであると心すべきであります。

日航機墜落事故で救護活動中の隊員
昭和61年 防衛白書

都城市特別攻撃隊戦没者慰霊祭

理　事　鮒田英一

令和7年4月6日（日）、第49回「都城市特別攻撃隊戦没者慰霊祭」に参列しました。本慰霊祭は、毎年4月6日、宮崎県都城市内の都島（みやこじま）公園（旧陸軍墓地）の「都城特攻振武隊　はやて」慰霊碑前において「都城市特別攻撃隊戦没者奉賛会（会長：都城市長）」により開催されています。

大東亜戦争末期、都城東及び西飛行場からは四式戦「疾風（はやて）」を特別攻撃機として、昭和20年4月6日の第1特別振武隊から7月1日の第１８０振武隊に至るまで17次にわたる特攻部隊が沖縄戦線に出撃しました。「はやて」慰霊碑は、戦没33回忌に当たる昭和52年、遺族や各方面関係者の尽力により永久平和の願いをこめて建立され、都城から飛び立った特攻隊戦没者79名と掩護隊戦没者61名が合祀されています。

都島公園の慰霊祭会場風景

この日は、うららかな晴天に恵まれ、慰霊碑を囲む桜花は満開を迎えていました。参列者は約１２０名で、関係者の高齢化とともに各地の慰霊祭同様、参列者数は年々減少傾向にあります。

10時30分に開式となり、参列者総員による黙祷の後、池田宜永（たかひさ）奉賛会会長が祭文を奏上、岩崎朗（あきら）宮崎県陸修偕行社会長が追悼の辞を奉読、裏千家淡交会宮崎支部都城分会が追悼の茶を献じました。続いて、奉賛会会長、遺族、来賓等による献花がおこなわれ、都城市議会議長らによる来賓挨拶、「弔特攻勇士（とっこうゆうしをとむらう）」の献詠、都城市立夏尾中学校の生徒代表による平和へのメッセージが披露されました。

最後に戦没隊員5名の御遺族を代表して、昭和20年5月25日に出撃した第57振武隊・山下孝之伍長（少飛、享年19歳）の甥にあたる山下浩一郎様から、毎年の立派な慰霊祭開催に対し関係者に謝意が述べられた後、隊員の遺書が紹介されました。山下伍長は、出撃前日の5月24日、山口県防府から故郷・熊本県八代の上空を飛行して都城に到着しています。出撃直前の遺書には「いよいよ、この世ともお別れです。宮崎の都城、これが私の最期の地です。5月25日8時、これが私が空母に突入する時です」から始まり、飛行場まで慰問に来てくださった方々への感謝と姉弟への深い思いが託され、最後に「お母さん、私は笑って元気に行きます。お母さん、お体を大切に。私はお母さんがいつも言われるお念仏を唱えます。南無阿弥陀仏」と認（したた）められています。山下様は今でも、19歳の短い生涯を閉じた叔父の遺書を読み返すたびに胸が熱くなると、長い歳月を経ても変わらぬ心情を率直に語られていました。

この後、一同起立し「はやて」慰霊碑に深々と一礼を捧げ、地元の多くの方々が準備運営に尽力された厳粛な慰霊祭は、つつがなく終了しました。

「都城特攻振武隊　はやて」慰霊碑

第42回宮崎特攻基地慰霊祭参列報告

専務理事　石井光政

令和７年４月６日（日）10時半から、宮崎ブーゲンビル空港滑走路の隣にある、宮崎特攻基地慰霊碑前で、第42回宮崎特攻基地慰霊祭が斎行されました。

ここには、旧海軍赤江飛行場が有り、その海軍航空隊跡地に昭和58年３月に、ここから飛び立ち亡くなった特攻隊員（銀河特攻機47機（１４０名））を含む３８５柱、及び、宮崎県出身で宮崎基地以外の基地から発進した英霊４１４柱、合計７９９柱が合祀された慰霊碑が建立され、例年４月の第１日曜日に慰霊祭が斎行されています。

今年も、約１００名の参列者を迎え、宮崎特攻基地慰霊祭実行委員会　後藤徹夫　会長のもと以下の式次第に従って済々と行われました。

１　開会の辞
２　国歌斉唱並びに国旗掲揚
３　黙祷
４　追悼の辞（宮崎特攻基地慰霊祭実行委員会会長　後藤徹夫氏）
５　慰霊のことば（宮崎市長（永山副市長代読）、遺族代表（黒木英子氏）
６　遺書朗読（宮崎大学　学生放送局員　西川俐穂さん）
７　献花
８　作文披露（赤江小学校卒業生代表（新中学１年生）３名）
９　祭電披露
10　吹奏楽演奏（赤江小学校吹奏楽部：おぼろ月夜、ふるさと）
11　閉会の辞

赤江海軍航空隊は昭和18年12月１日に練習航空隊として現在の宮崎空港を中心とした周辺一帯に発足しました。戦況の変化に伴い、昭和19年８月１日から作戦航空基地となり、陸海軍の航空機が発進して行きました。現在も掩体壕が空港周辺に残っており、赤江地区の住民が軍と一体となって戦争を遂行したことが伺えました。

この様な背景もあり、赤江小学校の生徒は課外活動の一環として６年生になると慰霊碑を見学し、修学旅行で知覧等を訪れ、さらに、特攻基地を題材とした劇を行っており、今回の作文の内容も、単に悲しいとか悲惨だとかでなく、戦没者に対する感謝の念も含んだ心に響く内容でした。

一人の中学生は、特攻劇で特攻隊員の役を演じた感想を次のように述べています。「・・・私の演じる場面では、出征する特攻隊員と、その母親の場面で、演じているうちに、まるで自分の事の様に思い、涙が溢れ出てきそうになりました。今を生きている私たちは、戦争のことをほんの一部の事しか知りません。実際に経験していなければ本当に全てのことを知ることは出来ないのです。ですが、あってはならないことが日本で起きたという事実は決して消えません。少しの事しか知らなくても、自分が分かる精一杯のことを語り継いでいけばいい。そうすれば、日本のために戦ってくれた人たち、また、その家族、そして、平和を祈り続けたその時代を生きていた人たちが望んだ平和な国に、また一歩近づけるきっかけになるのではないかと、私は思います。今、私たちが過ごしている当たり前の生活が、どれだけ幸せなことなのか、日々思いながら、明日を迎えたいです。」

この様な教育をしている宮崎市に敬意を表したいと思います。

慰霊碑の傍らの国旗掲揚塔の国旗と海軍旗はこの日は半旗でした。

半旗の国旗と海軍旗

戦艦「大和」戦没八十年追悼式に参列して

評議員　原島淳子

令和7年4月7日（月）、呉市上長迫町　長迫公園（旧呉海軍墓地）内「戦艦大和戦死者之碑」前において斎行された、戦艦大和会主催による戦艦「大和」戦没八十年追悼式に、当顕彰会を代表して参列させていただきました。

この慰霊祭の会場は、旧呉海軍墓地内ということもあり、周りには沢山の慰霊碑が建立されている場所です。

桜の下の慰霊碑

追悼式は、ご遺族・来賓・戦艦大和会会員等大勢の参加者が参列する中、大和会川西副会長の開会の辞で始まり、軍艦旗掲揚・黙祷と続き、主催者である大和会小笠原会長による「散華された乗組員の方々の鎮魂・慰霊・遺訓の継承を後世に引き継いで行くことが使命であり、この使命を果たすため毎年慰霊を行っており、次の世代に伝承することを通じ平和日本の繁栄と世界平和の維持に貢献することが英霊の遺沢に応える道であると確信している。天一号作戦で亡くなった方々等多くの散華された方々に限りない感謝と哀悼の誠を捧げその御霊の冥福を祈念する。」という想いのこもった式辞と進み、来賓代表による追悼の辞・漢詩「戦艦大和」という追悼吟詠・来賓紹介・参列者一同による献花奉納・追悼合唱と続き、軍艦旗降納・大和会花戸副会長による閉式の辞にて無事追悼式は終了しました。

今年も降りしきる花びらと、沢山の参列の方々が見守る中行われた慰霊祭。今年は、天一号作戦で大和が出撃し沈んで80年の年になります。あらためて散華された方々の事を思い手を合わせずにはいられませんでした。

また、大和と共に出撃した第二水雷艦隊軽巡洋艦矢矧・駆逐艦冬月・涼月・雪風・初霜・浜風・朝霜・磯風・霞の乗組員で散華された方々がいる事も忘れてはならないと強く思い、そして御霊のご冥福を共にお祈りしたいと思いました。

長迫公園には軍艦・駆逐艦に限らず潜水艦・大東亜戦争戦没者等々沢山の慰霊碑が建立されております。是非お時間をつくり一つ一つの慰霊碑に手を合わせに来ていただけたらと思います。

最後にこの句を捧げます。

満開の　桜の花に見送られ
征きし貴方の　面影偲ぶ

追悼合唱

第58回戦艦大和を旗艦とする特攻艦隊戦没将士慰霊祭

専務理事　石井光政

令和７年４月８日（火）13時50分から、鹿児島県徳之島の犬田布岬に於いて、「戦艦大和を旗艦とする艦隊戦士慰霊祭実行委員会（会長　大久保　明　伊仙町長）」により、日本海軍最後の特攻艦隊として出撃した「大和」を旗艦とする第２艦隊「軽巡　矢作、駆逐艦　雪風・濱風・磯風・朝霜・霞・初霜・冬月・涼月」の慰霊祭が斎行され、約２００名の参列者と共に、戦没者のご冥福を祈り、未来永劫に語り継ぐ誓いを新たにしました。

（例年、大和が沈んだ４月７日に行ってきましたが、今年は、入学式等の行事と重なったため、一日遅れの８日になったとの事でした。）

慰霊塔は、大和の艦橋の高さと同じ24メートルで、昭和43年に鹿児島大学名誉教授　中村晋也　氏（文化勲章受章の彫刻家）が設計し、眼前に南シナ海が広がる犬田布岬に建立されました。

式は、西犬田布婦人会による「ああ犬田布岬」の舞から始まり、国旗・軍艦旗掲揚、神職による修祓の儀、降神の儀、祝詞奏上のあと、大和が沈んだ時刻（14時23分）に全員で黙祷を捧げ、その後、大久保明伊仙町長及び、大西哲海上自衛隊第一航空群司令（鹿屋航空基地）による慰霊のことば、参列者による玉串拝礼と続き、巫女による浦安の舞、神職による昇神の儀、国旗・軍艦旗降下で厳粛かつ済々と行われました。

最後に、大久保明町長がご挨拶の中で、徳之島は琉球列島を見た時、ちょうど中心に存在する。今の東アジアの環境を考えた時、徳之島に自衛隊を配備することを政府は考えて欲しいと述べられていて、国防意識の高さに感銘を受けました。

この慰霊祭は伊仙町をあげて毎年斎行されており、今後も末永く亡く斎行され、亡くなられたご英霊に感謝と敬意を捧げて下さるものと思います。伊仙町の皆様に感謝するとともに、心温まる慰霊祭に参列でき、充実した一日でした。

「ああ犬田布岬」の舞（西犬田布婦人会）

高さ２４ｍの慰霊塔と式典会場

万世特攻慰霊碑第54回慰霊祭

評議員　金古　真一

令和7年4月13日（日）、「万世（ばんせい）特攻慰霊碑第54回慰霊祭」（以下「慰霊祭」）が、万世特攻慰霊碑奉賛会主催により、鹿児島県南さつま市加世田に建立（昭和47年5月）されている万世特攻碑「よろずよに」の前において、斎行された。

万世特攻基地は、昭和19年末、陸軍最後の特攻基地として建設され、昭和20年3月から6月にかけて飛行第55戦隊、特別攻撃隊・振武隊及び飛行66戦隊の計２０１名（17歳の少年飛行兵を含む）が、祖国防衛のために沖縄方面に出撃し散華されている。

慰霊祭は、夜半からの強い雨も止み、新緑眩しい好天の下で挙行され、参列者は全国各地からのご遺族46名、旧隊員等４名をはじめ一般参列者及び万世特攻慰霊碑奉賛会関係者等、約２００名であった。

慰霊祭の開始に先立ち、海上自衛隊鹿屋航空基地所属のＰ－１哨戒機１機が、会場上空を航過、南方上空に向けた慰霊飛行を行った。また、陸上自衛隊国分駐屯地の音楽隊は、献奏等を実施した。

開式のことば、国旗掲揚、黙祷に続き、奉賛会会長である本坊南さつま市長が、追悼のことばを述べられた。

遺族代表である飛行第66戦隊の一員として散華された毛利　理大尉の甥にあたる毛利　良一氏が、長きに渡り奉賛されている南さつま市を始めとする関係各位への謝意、この地を訪れる度に特攻の意味を自問し続ける胸中を慰霊の言葉として奉じられた。

続いて、旧隊員を代表して飛行第66戦隊の操縦者であった上野　辰熊氏は慰霊の詩として、飛行第55戦隊、特別攻撃隊・振武隊及び飛行66戦隊の部隊が辿った途を振り返られ、歴史のかなたとなりつつ経験を語り継ぐ役割を全うするとの誓いを述べられた。

祭電が披露された後、詩吟朗詠錦城会加世田道場の皆様による献吟、音楽隊による「悲しみの譜」が奉送される中で参列者全員による献花が行われた。

その後、鹿児島県立加世田高等学校及び学校法人希望ヶ丘学園鳳凰高等学校放送部員４名が、万世飛行場から出撃・散華された12名が遺された遺書・手紙・遺詠を朗読した。地元バイオリニストによる独奏とともに、心を込めた朗読には多くの遺族の方々が涙を流されていた。引き続き、学生を代表し鹿児島県立常潤高等学校生が、若者の誓いを述べた。その後、国旗が降納され、閉式のことばをもって、慰霊祭は終了した。

上野辰熊氏

地元高校生代表の皆さん

第六十六回出水特攻碑慰霊祭に参加して

評議員 原 知崇

鹿児島県の北西に広がる出水平野は古来、薩摩の北の玄関口に守りを固めた武家屋敷群や、冬は一万羽を超える鶴の越冬地で知られる土地だが、おおよそ広大な平地が続く農村地帯であった。大東亜戦争を前にして鹿屋基地に加え、更なる海軍航空基地増強のための用地買収、移転が速やかに進められていた。

昭和十三年から始まった工事で総面積三百ヘクタールの出水飛行場を完成し、十五年からは飛行作業が実施された。開戦劈頭の真珠湾攻撃隊に於ける九七艦攻の雷撃訓練も同基地で行われている。この場所に出水海軍航空隊が昭和十八年四月一日に開隊した。

赤とんぼと呼ばれた布張りの複葉機「九三式陸上中間練習機」を使用し操縦術を教育する練習航空隊に指定され、第十二連合航空隊に編入される。

二十年二月十一日には名称が第一出水海軍航空隊と変わるが、米機動部隊の沖縄、九州近海への接近、そしてＢ29による本土爆撃が始まり、戦局の悪化に伴い昭和二十年三月一日に解隊。それまでの間、第一出水海軍航空隊では甲飛十一、十三期、乙飛十七、十九期、十三期予備学生、十四期予備学生の操縦訓練が約半年づつ行われ、合計千五百名が陸上機の操縦術を修めた。

解隊により練習航空隊は朝鮮全羅南道光州郡に新設された光州海軍航空隊に移動し、出水基地は作戦基地となるため、爆撃機「銀河」、局地戦闘機「紫電」「雷電」、中型陸上攻撃機「九六陸攻」「一式陸攻」が進出した。

しかし練習航空隊機材の移動中であった三月十八日、出水では初となる米艦載機による大規模空襲を受けた。そのため基地施設の多くを焼失してしまう。

三月十八日は九州各地の基地より特別攻撃隊が敵機動部隊を目指して陸続と出撃していった。出水基地からも十九日、二十一日と銀河隊が特別攻撃隊として出撃した。

四月になると沖縄への米軍による上陸が開始され、我が方も菊水作戦を開始するものの、沖縄における敵の侵攻速度は極めて速く、我が方の飛行場を確保、修理して使用し始めた。それに対処するため、沖縄方面の米軍に向け四月十六日には第七銀河隊、翌十七日には第八銀河隊が出撃するも、十七日から二十二日の間、出水基地はＢ29の編隊によって四度の爆撃を受け、飛行場機能は壊滅的とも言える被害を受けた。この攻撃では基地周辺の民間人も含めた多くの死傷者が出ている。

そして終戦。我が国は平和の世となったのだが、昭和三十年頃まで出水基地の一体は爆弾で開いた穴や、火災の焼跡が広がり、荒れるに任せた状態であったようだ。実際、現在でも航空隊時代の建造物の半ば崩れた遺跡は周辺に散見され、僅かとはいえその雰囲気を感じ取ることが出来る。その土地に開拓者が次々と入植し、食料不足を解決するという新たな使命を帯て開墾が進められていった。

時すぎて昭和三十四年、鎮魂と平和への誓いを求めて地元有志の中から、出水市特攻碑を建立しようという声が上がり、特攻碑建設準備委員会が結成された。

戦後すぐの時代にも戦死者を悼むために何かをしたいという声はあったようだが、米軍の占領下ではそれも叶わなかったようだ。

軍籍にあった市民や、海軍軍人に下宿を貸していた市民などが中心となって参加され、終戦から十五年経った昭和三十五年四月十六日「特攻碑　雲こそわが墓標之碑」の除幕式が出水市特攻碑公園で行われ、第一回慰霊祭が斎行された。碑銘は予備学生を描いた阿川弘之氏の小説から採られている。

その後組織は出水市特攻顕彰会と代わ

り、慰霊祭が毎年続けられている。

今回、変わらず四月十六日に斎行された「出水特攻碑慰霊祭」に参加させていただいた。

日差しの強い日であったが、まだ桜の花が残り緑豊かな公園は、航空隊本部庁舎をはじめとしたかつての中心施設の近くにあり、碑は司令部地下壕の上に建っている。その司令部地下壕は見学も可能で、他にも一式陸攻のプロペラや、九七戦や九七式輸送機で使用されたハ一乙エンジンとプロペラ、かつて航空隊正門にあった哨舎などに接することが出来るので、十一時の開式までの間見学させていただいた。他にも、慰霊祭の日であるため、隊員のお写真なども展示されており、お一方お一方のお顔を拝見させて頂いた。どれも遺族が持ち寄られたお写真であろう。出水に来る前、予科練時代の七つボタン姿や、予備学生の官給士官服姿、航空服姿も多い。粋なポーズのスナップ写真を拡大したものもあれば、戦死後累進・追叙された勲章や階級章を描き足したり、下士官の軍帽を巧緻に士官のものに描き直した遺影もある。こうしたものは遺されたご遺族の失った者へのお気持ちの深さを感じる。どの顔も静かで、穏やかで、目に笑みすら浮かべているのが印象的だった。

特攻碑　雲こそわが墓標之碑

慰霊祭は陸上自衛隊の儀仗隊と、消防団によって国旗と軍艦旗の掲揚が行われ、国分駐屯地音楽隊の伴奏による国歌斉唱で始まった。

慰霊祭は同基地より出撃し、または空襲などで戦死された軍人六百三十八柱を悼むために催されている。うち、特攻隊員は二百余柱である。以前は隊員、ご遺族が多数招待されて慰霊祭を支えていたようだが、現在では参列者百二十名ほどの中で、ご遺族は数えるほど。

特攻顕彰会会長でもある椎木真一出水市長に倣い、私もご参列の皆様とともに特攻隊が飛び立っていった南海の方向に深く頭を垂れた。黙祷を捧げ、若くして祖国を守るため命を捧げた軍人の崇高な志と不撓の精神を偲びつつ、御霊安かれを祈った。続いて慰霊碑に白菊の花束を手向けさせて頂いた。

慰霊碑は先にも書いた戦歿者の慰霊塔「雲こそわが墓標之碑」の他にも四基が並んでいる。「海軍航空隊出水基地陸攻隊銀河隊出撃之地」碑。出水海軍航空隊に関わる全戦歿者六百三十八柱の氏名を

記した「殉国戦士の碑」。度重なる空襲で戦死した地上員のご遺体のうち、最後まで氏名を特定出来なかった方を埋葬した「無名戦士の碑」。昭和二十年四月、出水基地に進出していた松島空の九六陸攻マシ３７１号機が地形偵察を実施、帰投中に敵機の襲撃を受け被弾、機体は山中に墜落、戦死された搭乗員全員の御霊を慰める「慰霊塔」。

この五基が並ぶ様は、この地で戦われた今は亡き方々の存在を無言のうちに語るものである。

陸攻隊銀河隊出撃之地の碑

ご遺族の方は「これからも私たちは、二度と戦争遺族を出さないという強い信念をもって顕彰を続けて参ります。」とお話しをされた。また、戦後八十年であることから、初めてご地元の中学生が参列されたそうだ。彼らは平和への願いを「私たちはこれからの平和を担っていく世代として、戦争という過去の過ちを二度と繰り返さないため努力していく必要があります」という言葉で述べられた。地域の歴史を学ぶ教育の中で出水基地や特攻隊について学ぶ時間があるのだと思料するが、この公園は地元の小中学生にとっては、夏休みにラジオ体操をする場所でもあるそうだ。彼らにとって戦争や特攻隊員は、少し日常に身近な存在でもあるのだろう。

殉国戦士の碑

その後、儀仗隊の捧銃、音楽隊の記念演奏があり、演奏の最後に「同期の桜」があり、参列者全員での合唱となった。音楽隊の演奏で儀仗隊及び消防団による軍艦旗降下があり、閉式となった。

現在でも世界各地で新たな戦争が起こっている。同時に、我が国を取り巻く情勢も果たして平和という方向に向かっているとは言い難い。平和や自由を当たり前に享受出来ている時代は努力なしには続かない。その中にあって、二度と戦争遺族を出さないという強い信念を持ったご遺族の決意、また平和を担い、戦争という過ちを繰り返さないという中学生のお言葉には断固たる覚悟を感じた。

特攻隊員は何を守るため、何を残すためにこの地から飛び立って行ったのか。飛び立つと定まった時に、一人の意思を持った人間である彼らの心には何があったのか。過去の悲劇を同じように繰り返さないためには、特攻隊員の心情とはどうしたものだったかを考える必要がある。その機会として、この慰霊祭には大きな意義を感じた。

令和７年度国分基地特攻隊員戦没者慰霊祭及び慰霊の集いに参列して

編集長　金子　敬志

令和７年４月20日（日）、鹿児島県霧島市に於いて斎行された「令和７年度国分基地特攻隊員戦没者慰霊祭及び慰霊の集い」に参列させて頂きましたので報告します。

当日は、夜からの雨も午前の慰霊祭が始まる頃には止みました。

本慰霊祭は、午前と午後、２か所において斎行されます。これは、霧島市の市町村合併前の旧国分市と旧溝辺町において斎行されていたそれぞれの慰霊祭が継続されているためで、主宰団体名が「国分・溝辺特攻慰霊碑保存委員会」となっており、委員長は「霧島市長」で霧島市が中心となって斎行されています。

自衛官による国旗掲揚

午前中の慰霊祭は、陸上自衛隊国分駐屯地正門前にある特攻碑公園内の顕彰碑「特攻機発進之地」前に於いて11時から開始されました。

参列者は、ご遺族32家族71名を含め約１４０名でした。

式次第は次のとおりです。

1　開式のことば
2　拝　礼
3　国旗掲揚
4　黙とう
5　慰霊のことば
6　追悼のことば
7　献　花
8　儀仗隊敬礼
9　献　奏
10　誓いの言葉
11　閉式のことば

「誓いの言葉」は霧島市立舞鶴中学校生徒代表の高橋圭斗君が行いました。

慰霊祭は約１時間で終了しました。

国分駐屯地隊員による儀仗隊敬礼

終了後は、駐屯地内の食堂において12時30分からご遺族の方々を交えた昼食会が開催されました。昼食会の時間は約１時間でした。

午後の慰霊祭の時間まで少し余裕がありましたので、駐屯地の資料館を見学させて頂きました。名称は「薩摩隼人記念館」と言います。

決して大きな資料館ではありませんが、国分駐屯地に関する資料だけでなく、旧海軍時代の資料も展示されていて、特攻隊に関しては特別にコーナーが設けられ

国分駐屯地資料館「薩摩隼人記念館」

ていますので　機会が御座いましたらご覧になってください。

その後、鹿児島空港近くの溝辺上床公園に移動して「国分基地特攻隊員戦没者慰霊の集い（溝辺会場）」に参列しました。

参列者は、ご遺族11家族20名を含め約80名でした。午前の慰霊祭に引き続き参列された方が多かったように感じました

慰霊祭は上床公園の高台に設置された「特攻の碑」前で14時30分から開始されました。

上床公園の「特攻の碑」

この頃には天候も回復し、雲の間から青空も覗くようになりました。

式次第は

1　開式のことば
2　国歌斉唱
3　黙とう
4　慰霊のことば
5　献　花
6　誓いのことば
7　「同期の桜」合唱
8　第12普通科連隊音楽部演奏
9　閉式のことば

「誓いのことば」は霧島市立溝辺中学校3年　岡部謙吾君が行いました。

慰霊祭は約1時間で終了しました。

なお、上床公園にも特攻関係の資料が、コミュニティーセンター内の一角の展示されています。

コミュニティーセンターの特攻展示室

沖縄県護国神社春季例大祭「あゝ特攻」勇士之像慰霊祭

評議員　髙松真希

令和7年4月23日（水）、この日の沖縄は早朝から濃霧に包まれ、飛行機の発着にも影響が出ました。沖縄では霧は非常に稀だということです。

その後、那覇市内は低い雲に覆われましたが、沖縄県護国神社には続々と参列者が集まり、第66回春季例大祭と第7回「あゝ特攻」勇士之像慰霊祭が、斎主加治順人宮司のもと厳粛に執り行われました。

今回、例大祭と慰霊祭に石井事務局長と共に参列させて頂きましたので報告致します。

また、今回は祭式が始まるまでの間に、茶道裏千家淡交会沖縄支部の方々が参列者らにお抹茶を振る舞ってくださいました。その茶道裏千家の千玄室大宗匠は元特攻隊員で、今年１０２歳でありながら今でも平和を訴える活動を続けられています。淡交会の方からお点前を頂戴した際に千玄室大宗匠の平和活動について話が及んだことは、特攻隊の慰霊祭を斎行する今日の日を更に特別なものにしました。

1　春季例大祭

定刻の13時から14時まで、第66回春季例大祭が斎行されました。

終戦80年の節目の年である今回の例大祭は盛大に執り行われ、拝殿内の席と拝殿外に設置されたテント席は約１３０名の参列者で全て埋まっておりました。

春季例大祭に先立ち電報の紹介がありましたが、議員、護国神社、神社、各団体など全国各地から非常に沢山の電報が寄せられていたのが印象的でした。

例大祭の拝殿内

式次第は次の通りです。

一、黙祷
一、国歌斉唱
一、修祓の儀
一、お清め
一、斎主一拝
一、献饌
一、宮司・祝詞奏上
一、開催委員長・祭文奏上（沖縄県護国神社代表役員会長　比嘉良雄様）
一、沖縄県遺族連合会会長・祭文奏上（我部政寿様）
一、献華の儀（華道家元池坊沖縄支部）
一、御奉茶の儀（茶道裏千家淡交会沖縄支部）
一、神楽奉納
一、太鼓奉納演舞（航空自衛隊那覇基地太鼓部）
一、玉串奉奠
一、撤饌
一、斎主一拝
一、斎主挨拶（加治順人宮司）

神楽だけではなく献華、御奉茶、太鼓演舞ととても華やかな春季例大祭となりました。太鼓の力強い律動に呼応するか

のように一時は突然の激しい雨に見舞われましたが、拝殿外もテントが設置されていたため何ら問題がなく、例大祭が終わる頃には雨は止んでおりました。

加治宮司が斎主挨拶の最後に、このあと特攻勇士之像の前で慰霊祭を斎行するとの案内をしてくださいました。その時に、特攻勇士之像の場所を確認するように、着席されたまま後ろを振り返っていらっしゃる方が大勢おられたことが、興味を持ってくださったという認識に繋がりありがたかったです。

ところで、いつもお世話になっております沖縄県護国神社の土地の歴史と由緒について、この機会に簡単に紹介させて頂きます。

沖縄県護国神社は、那覇空港と沖縄県庁の中間に位置する奥武山公園の中に鎮座しています。

この場所は昔は海に浮かぶ離れ小島で、小さいながらも伝説や民話がいくつも残る神秘的な島だったようです。戦後アメリカ占領時に埋め立てがありその後完全に陸地となったので、ここが島であったという面影は今となっては全く見受けられませんが、琉球王国時代にこの島は景勝地として名を馳せていたため、当時その噂を聞きつけた江戸の浮世絵師・葛飾北斎が「琉球八景」のひとつに選び描いたほど、風光明媚な場所でした。

時は移り昭和11年に、沖縄県護国神社は招魂社として創建され、昭和15年に県社相当の社格を与えられました。

ところが昭和20年の沖縄戦で、神社は一部を残して崩壊してしまいます。その後境内は学校用地として使用されていましたが、沖縄戦での戦没者をお祀りしたいと県内各地から声が上がり、募金活動が行われました。その結果、昭和34年に仮社殿が建立され、戦後第一回春季例大祭が斎行されたということです。

そして昭和47年の沖縄本土復帰を機に、昭和48年に宗教法人沖縄県護国神社として認証されました。その後、日清日露戦争から先の大戦までの国難に狗せられた沖縄県出身の軍人、軍属をはじめ、沖縄戦にて散華された一般住民並びに本土出身の御英霊を祀る神社として崇拝され、参拝者が絶えず、お見受けするに「万人に寄り添う神社」として非常に慕われ、今日を迎えております。

沖縄県護国神社の鳥居の両脇には、背の高い一対のヤシの木が空に向かって真っ直ぐに伸びており、沖縄独特の景観が見て取れます。青い空、赤い鳥居、ヤシの木、そして緑の濃い南国の草木が全て一緒に視界に入り、それら目に映るもの全ての相乗効果とでも申しましょうか、情熱を帯びたまっすぐな力強さを感じながら、気を引き締めて鳥居をくぐらせて頂いております。

２「あゝ特攻」勇士之像慰霊祭

14時20分から14時50分まで、「あゝ特攻」勇士之像慰霊祭が、31名の参列者と共に斎行されました。

今年で7年目となる慰霊祭でしたが、年々、参列者の数が僅かながらに増えつつあります。

それは加治宮司が例大祭の最後に参列者に呼びかけてくださることが要因であると感じております。

参列者の中には今回も2組のご遺族の姿がありました。

式次第は次の通りです。

一、黙祷
一、国歌斉唱
一、修祓の儀
一、お清め
一、降神の儀
一、斎主一拝
一、献饌
一、宮司祝詞奏上
一、玉串奉奠
一、撤饌

一、昇神の儀
一、斎主挨拶（加治順人宮司）
一、弊慰霊顕彰会・石井事務局長の挨拶

玉串奉奠は加治宮司に続いて沖縄県護国神社代表役員会長・比嘉良雄様、沖縄県遺族連合会会長・我部政寿様、弊慰霊顕彰会・石井光政事務局長、御遺族・我喜屋様、御遺族・庄司様の５名の方が行いました。

加治宮司による祝詞奏上

斎主の挨拶で加治宮司は、沖縄県護国神社に「あゝ特攻」勇士之像が建立されたのは7年前で、その時から毎年慰霊祭を執行していること、また、沖縄は地上戦があったため空の特攻だけではなく義烈空挺隊など陸の特攻、そして海では戦艦大和、特攻艇震洋、マルレと、空・陸・海と全ての戦いが繰り広げられ散華されたため、沖縄の特攻勇士之像にはそれら全ての戦没者をお祀りしているのが特徴であると述べられました。

次に、この日参列された御遺族をご紹介して頂きました。

我喜屋さんは兄の元次郎さんを、フィリピンからの出撃で亡くされています。

庄司さんは叔父にあたる方を沖縄戦で亡くされています。

沖縄の正装である「かりゆし」を着用された御遺族が目頭を押さえて、ハンカチの四隅が濡れるまで終始涙を流されていらっしゃる姿を拝見し、戦後80年経っても癒えることのない悲しみを思い心が痛みました。

御高齢となられた御遺族の中には、「今年が最後の訪問になるかも」と言いながら、杖をつき、足を引きずり、必死に坂道や階段を登り、炎天下や雨などの天候に体力を奪われながら、それでも慰霊祭の会場に来られる方も見受けられます。

そのような方々を目の当たりにする度に、史実を追い求め後世に伝えていくことの大切さに気付かされます。大事な家族を戦争で亡くさないためには、どうしたらいいのでしょうか。この先戦争をおこさないためには、どうしたらいいのでしょうか。

慰霊祭に参列する度に考えさせられます。

沖縄県特攻勇士之像

第34回秋田県特別攻撃隊招魂祭に参加して

評議員　中村　敏弘

令和7年4月29日（日）、「第34回秋田県特別攻撃隊招魂祭」が秋田市総社神社にて秋田県特別攻撃隊慰霊実行委員会（委員長：枡谷政雄氏）主催で厳粛に執り行われました。この招魂祭に参列する機会を得ましたので報告します。なお、参列者は、慰霊実行委員会をはじめ、遺族関係者、県議会議員、神職、民間有志など約50名の参列であり、例年と変わらない状況でした。

1　招魂祭の概要

当日は生憎の雨模様となったため、社務所内にて招魂祭は執り行われました。東雲（しののめ）飛行場戦没者顕彰会の小野立氏（能代市議会議員）の司会による開式の辞で招魂祭は開始されました。なお、この招魂祭は「昭和の日記念祭式」も兼ねており、まず初めに昭和天皇武蔵野御陵へ参加者者全員で遥拝しました。その後、国歌斉唱、黙祷・ラッパ「国の鎮め」吹奏、神事、修祓・降神・献饌、祭詞奏上・神前神楽奉納と続きました。

続いて、秋田県陸海軍特別攻撃隊五十六柱全てのご芳名朗読、元土浦海軍航空隊で夜間戦闘機「月光」搭乗員だった藤本光男氏（代読　伊藤見一氏）による、ご自身の戦後八十年を振り返っての追悼文朗読、大西中将遺書朗読と続きました。斎主・玉串拝礼が執り行われた後、玉串拝礼となり、私も顕彰会理事の宮本雅史氏とともに玉串拝礼させて頂きました。

撤饌、昇神で神事終了の後は、慰霊奉納演奏及び吟詠、秋田県特攻英霊「高橋忠　海軍少尉」のご遺書朗読、「秋田県民歌」を全員で奉唱しました。

その後、主催者を代表して枡谷実行委員長からご挨拶ののち、全員で聖寿万歳及び「海ゆかば」を合唱して滞りなく終了しました。

社務所内で斎行された招魂祭

招魂祭終了後、顕彰会理事の宮本雅史氏による『「特攻の聲（こえ）』隊員と遺族の八十年」と題した記念講演が行われました。

2　所見等

（1）秋田県特別攻撃隊招魂祭は、自治体が関与しない慰霊祭（招魂祭）として毎年この時期に実施されている慰霊行事です。実行委員長のご尊父である故枡谷健夫氏の意志を受け継いだご長男舛谷政雄氏をはじめとする心ある方々が中心となり、三十年以上にわたり、しっかりと慰霊行事が行われていることに改めて感銘を受けました。

（注：故枡谷健夫氏は、昭和十九年四月、十九歳の時に海軍工作学校沼津校に志願入隊、昭和二十年三月卒業後、長崎県大村湾川棚基地に編成された第三特攻戦隊川棚突撃隊に配属、その後、終戦。）

（2）参加者全員で秋田県民歌を「秀麗無比なる鳥海山よ…」と声高らかに英霊に届けとばかりに奉唱した際には感極まるものがありました。このほかにも秋田県出身の特攻隊員の遺書を毎回朗読するなど、趣向を凝らした式次第になっていると感じました。

なお、「秋田県民歌」は日本最古の県民歌であり、先の大戦前の昭和五年、教育勅語四十周年を記念して秋田県が歌詞を公募して作られた歌であり、当時の秋田県出身の特攻隊員は全員が歌っていた歌とのことです。

（３）国内の慰霊行事全てにおいて言えることではあるが、ここ秋田県も例外ではなく、関係者の高齢化が進んでいると感じた。今後ともこの慰霊祭（招魂祭）が後世に伝えることができるよう、特攻隊戦没者慰霊顕彰会としても何らかの支援ができればと考えつつ、帰京の途につきました。

３　その他

招魂祭の前日である４月28日、秋田県湯沢市を訪れ、秋田県特攻慰霊のひとりである故・高久健一海軍大尉の墓前にて、深い敬意を込めて手を合わせる機会を得ました。ご訪問には、高久大尉の従弟である高久臣一氏（湯沢市商工会議所元会頭）、ならびに伊藤壽々雄氏（湯沢ロータリークラブ元ガバナー）にご同行いただきました。

高久大尉は秋田鉱専を卒業後、北海道にて教職に就かれていました。しかし、学徒出陣が相次ぐ時代の流れの中で、自らの立場に深く思いを巡らせ、第13期海軍飛行予備学生として入隊を決意されました。その折、東北大学にも合格を果たされていましたが、ご両親は将来を案じ、休学という形で入隊を見守られました。その後、神風特別攻撃隊菊水部隊梓隊の一員として、陸上攻撃機「銀河」に搭乗し、昭和20年３月11日、鹿児島県鹿屋基地より出撃。西カロリン諸島ウルシー環礁に碇泊中の敵機動部隊に特攻を敢行し、戦死されました。享年二十二歳、あまりに若き命でした。

昭和23年、高久大尉のご尊父である故・高久彦太郎氏は、湯沢市内の長谷寺にお墓を建立されました。当時、湯沢市には米軍が駐留しており、墓の撤去を命じられる可能性もあった中、ご尊父様は揺るぎない信念のもと、慰霊の場を築かれました。その思いを偲ぶとき、胸が締め付けられる思いを禁じ得ません。

それから八十年――。ご遺族は「孫の世代にもしっかりと『特攻』の意味を伝えていかなければならない」と語られました。その言葉の重みが、訪問の余韻として深く心に刻まれています。

高久健一大尉のお墓の前で、右から伊藤壽々雄氏、筆者、高久臣一氏

第71回知覧特攻基地戦没者慰霊祭

評議員　倉形　桃代

令和7年5月3日（土）13時より知覧特攻平和観音堂（鹿児島県南九州市）前にて、知覧特攻慰霊顕彰会（会長・塗木弘幸南九州市市長）主催による「第71回知覧特攻基地戦没者慰霊祭」が催行された。前々日までの豪雨は去り、初夏らしい爽やかな晴天の下、新緑が美しく輝いていた。今年は終戦から80年の節目でもあり、昨年を上回る７００名（内・ご遺族は２２１名）の参列者があった。

式典は、開式のことば、日本礼道小笠原流鹿児島支部による献茶、黙祷後、僧侶による読経が始まり、ご遺族・各会代表が順次焼香した。その後、追悼の言葉、慰霊の言葉、続く（社）詩吟朗詠錦城会による献詠があり、今年は陸軍特別攻撃隊第百十一振武隊の若松藤夫少尉（昭和20年6月3日／沖縄西方洋上にて戦死・鹿児島出身）・誠第三十六飛行隊の岡部三郎少尉（20年4月6日／沖縄西方洋上・香川県出身）・誠第十七飛行隊の芝崎茂大尉（20年3月26日／那覇南西洋上・埼玉県出身）のご遺詠が吟じられた。電報披露の後、参列者全員の献花、陸上自衛隊国分駐屯地所属の儀仗隊による敬礼、第十二普通科連隊音楽部の献奏「海ゆかば」南九州市長の挨拶、演奏に合わせて全員で「加藤隼戦闘隊」「同期の桜」を歌い、閉式の言葉、一同礼をして慰霊祭は終了した。

ご遺族代表で慰霊の言葉を述べられた、伍井芳夫中佐（第二十三振武隊長／20年4月1日　慶良間南方洋上にて戦死・埼玉県出身）の次女・臼田智子様が、ご遺族代表として御父上の思い出を語られ「慰霊祭は、英霊との再会の場。遺族や関係者も高齢化していますが、特攻勇士の尊い犠牲があったことを忘れることなく、今後も慰霊祭を行うと共に語り継いでいくことをお誓いいたします」と述べられたお言葉が、特に心に残った。

取材を受ける臼田智子様

その後、希望者は三角兵舎跡地経由で鹿児島中央駅に向かった。茶畑の向こうに優美に聳える開聞岳が見えた。跡地の入り口には映画「俺は、君のためにこそ死ににいく」ロケ地になったことを記念する碑が建っていた。長い階段を登った台地の林の中に「三角兵舎の跡」の碑があり、向かいには写真付きの説明板が設けられている。

知覧の慰霊祭に参列したのは８年ぶりだった。懐かしい景色もあったが、道路に沿って綺麗に刈り込まれた街路樹や灯篭が整然と並び、平和会館までの広場には、お洒落な店舗がたくさんできていた。周囲には戦跡も多く残り、訪ね歩く為のマップも配られている。平和会館では、様々な企画展示やイベントが開かれ、語り部の話を聞けたり、証言ビデオを観ることもできる。鹿児島中央駅から知覧まではバスで約１時間半かかるが、途中に見える桜島や錦江湾の雄大な景色、天気が良ければ英霊も眺めたであろう茶畑と開聞岳の美しい姿を見ることができる。

慰霊祭の参列者は、子供さんからお孫さんの世代に変わりつつある。記憶と思いは確実に受け継がれていくのだと感じた慰霊祭であった。

第13回福岡県特攻勇士慰霊顕彰祭

理事長　岩﨑　茂

令和７年５月11日（日）、今年も福岡縣護国神社で特攻勇士慰霊顕彰祭が執り行われました。塚田征二会長のリーダーシップの下、今回が13回目の慰霊祭でした。

福岡県特攻勇士之像は平成25年５月８日に奉納・建立されました。福岡県出身の特攻勇士３０１名をお祀りしています。建立に伴い、塚田氏のご理解を頂き「福岡県特攻勇士顕彰会」が設立され、塚田氏が会長として、毎年建立日の５月８日に近い休日に「特攻勇士慰霊顕彰祭」が開催されています。

慰霊顕彰祭には年々、参加される方々が多くなっていることに感謝申し上げます。今年は、慰霊祭の後に「井上和彦氏講演会」、陸自有志隊員による音楽演奏等が行われました。

福岡縣護国神社は福岡市の観光スポットの大濠公園の近くにありますので、大濠公園を訪問された時には、少し足を延ばしてご参拝して頂きたいと思います。

参集殿内における式典

福岡縣護国神社
（福岡縣護国神社ＨＰより）

第59回特攻殉国の碑慰霊祭参列報告

専務理事　石井光政

令和7年5月11日（日）14時から、長崎県川棚町新谷郷の「特攻殉国の碑」前で「第59回特攻殉国の碑慰霊祭」が斎行されました。

当日は雨天の予報が出ていたため、碑の前はテントが張られていましたが、雨は降らず、ご遺族約25名を含む、約１２０名の方が参列されました。式典は、国旗と軍艦旗の掲揚後、特攻殉国の碑保存会会長で、新谷郷総代の寺井理治氏のご挨拶から始まり、ご遺族、地元自治体の長、議員、陸海自衛隊からの参加者等を含めた参列者の献花が行われ、国旗・軍艦旗の降納まで、荘厳かつ盛大に行われました。

碑は、大戦末期にこの地で訓練を受け、戦陣に散った震洋や伏龍等の隊員３５１柱を祭っています。その碑は昭和42年5月27日に有志や元隊員によって建立されました。

元隊員等のお気持ちが、碑文に表れているので、紹介します。

「昭和19年、日々悪化する太平洋戦争の戦局を挽回するため日本海軍は臨時魚雷艇訓練所を横須賀からこの地長崎県川棚町小串郷に移し魚雷艇隊の訓練を行った。

魚雷艇は魚雷攻撃を主とする高速艇で、ペリリュー島の攻撃硫黄島最後の撤収作戦など太平洋印度洋において活躍した。更にこの訓練所は急迫した戦局に処して全国から自ら志願して集まった数万の若人を訓練して震洋特別攻撃隊伏竜特別攻撃隊を編成し、また回天、蛟竜などの特別攻撃隊の練成を行った。震洋特別攻撃隊は爆薬を装着して敵艦に体当たりする木造の小型高速艇で七千隻が西太平洋全域に配置され比国コレヒドール島沖米国艦船四隻を撃沈したほか沖縄でも最も困難な状況のもとに敵の厳重なる警戒を突破して特攻攻撃を敢行した。

伏竜特別攻撃隊は単身潜水し水中から攻撃する特攻隊でこの地で訓練に励んだ。今日焼土から蘇生した日本の復興と平和の姿を見るとき、これひとえに卿等殉国の英霊の加護によるものと我らは景仰する。

ここに戦跡地コレヒドールと沖縄の石を併せて、ゆかりのこの地に特攻殉国の碑を建立し遠く南海の果てに若き生命を惜しみなく捧げられた卿等の崇高なる偉業をとこしえに顕彰する。

昭和四十三年五月二十七日

有志一同

元隊員一同

」

特攻殉国の碑

三重海軍航空隊飛行予科練習生戦没者等慰霊祭

評議員　中村　敏弘

令和7年5月25日（日）、第58回三重海軍航空隊飛行予科練習生戦没者ならびに三重海軍航空隊戦没者の慰霊祭、「若桜の碑」慰霊祭、そして第十二期甲種行予科練習生戦没者を祀る「海ゆかばの碑」慰霊祭が、三重県津市の香良洲神社の主催のもと、厳粛に執り行われました。今回、この慰霊祭に参列する貴重な機会を得ましたので、ここにご報告いたします。なお、香良洲神社は、古くより地域の人々に信仰される由緒ある神社であり、三重海軍航空隊ゆかりの慰霊行事を大切に受け継いできた神社でもあります。英霊を祀るこの慰霊祭もまた、神社の深い敬意と誠意のもと、年を重ねて開催されてきました。

三重海軍航空隊は、昭和17年（１９４２年）８月、海軍飛行予科練習生（予科練）の教育機関として創設されました。終戦までの３年間において、約３万８千名もの若き志士が入隊し、最盛期には約１万５千名が航空機搭乗員としての基礎訓練を受けました。

若櫻の碑

慰霊祭当日、前日まで降り続いた雨は奇しくもぴたりと止み、清らかに澄んだ青空のもと、若葉の輝きが際立つ佳き日に恵まれました。まずは、香良洲歴史史料館に隣接する「若桜の碑」霊園において、第58回三重海軍航空隊飛行予科練習生戦没者ならびに三重海軍航空隊戦没者慰霊祭が執り行われました。松阪市議会議員である森氏の司会進行のもと、式典は厳かに開祭。初めに、海上自衛隊試験艦「あすか」乗員が募金し軍艦旗を購入し、三重県隊友会に寄贈された自衛艦旗が掲揚され、天高くたなびきました。

その後の神事においては、玉串拝礼の栄を賜り、特攻隊戦没者慰霊顕彰会を代表して奉納の儀を執り行いました。また、神事に続き、「追悼の辞」を特攻隊戦没者慰霊顕彰会会長代理として代読し、尊き英霊への哀悼の意を捧げました。式典

三石氏を囲んで、右から森氏、三石氏、筆者

は後援会代表（三重県隊友会会長代理・三石氏）の挨拶、主催者代表（氏子総代・川北氏）のご挨拶へと続き、最後に参列者全員で「三重海軍航空隊」の隊歌を奉唱し、閉式となりました。

この後、約1キロ離れた「海ゆかばの碑」の前にて、昨年に続き慰霊祭が執り行われました。祭事の流れは、「若桜の碑」における慰霊祭とほぼ同様でしたが、ここに祀られる第十二期甲種飛行科練習生戦没者の歴史的背景についても、改めて思いを馳せる機会となりました。

戦後、三重海軍航空隊の各期は、三重海軍航空隊がかつて所在した香良洲の地に同期ばらばらに慰霊碑を建立し慰霊行事を行っていたそうです。その後、香良洲歴史史料館横に「若桜の碑」が建立されたこともあり、各慰霊碑は「若桜の碑」霊園へ順次移設されていったそうですが、やや離れた地に建立されていた第十二期甲種行予科練習生戦没者の「海ゆかばの碑」だけは何故かそのまま残され、今日に至ったとのことでした。「海ゆかばの碑」碑慰霊祭は毎年6月13日に催行していたそうです。これまで戦没者慰霊祭が第十二期甲種飛行予科練習生を含めない形で実施されてきたことに疑問を持たれていた三石氏のご英断により、昨年から「海ゆかばの碑」でも慰霊祭が行われることになりました。

慰霊顕彰の精神は、時代を超えて継承されていくべきものです。三石氏の挨拶において、「慰霊の念を後世へと伝えることこそが、隊友会の使命である」と述べられた言葉には深く心を揺さぶられるものがありました。我々、特攻隊戦没者慰霊顕彰会としても、この崇高な志を忘れることなく、平和への誓いを新たにする決意を固める機会となりました。

「海ゆかばの碑」前における集合写真

義烈空挺隊出撃80周年慰霊祭

理事　宮本　雅史

「義烈空挺隊出撃八十周年慰霊祭」が五月二十五日午前、熊本市の陸上自衛隊健軍駐屯地で行われ、遺族や自衛隊ＯＢら約百人が参列した。慰霊祭が行われた義烈空挺隊の慰霊碑がある広場は、整然と整備されチリ一つなく、慰霊碑は落下傘と花々に囲まれ、厳粛さを漂わせていた。

慰霊祭は、全日本空挺同志会の松尾辰蔵熊本支部長の開会の辞の後、献灯、西部方面音楽隊の演奏にあわせての国歌斉唱、黙祷と進んだ。

慰霊の詞では、熊本偕行会の中垣秀夫会長が、「空挺作戦は基本的に地上部隊と提携する戦略的な運用形態であり、隊員個々は必死の覚悟で敵中に降下しますが、作戦としては地上部隊と提携して帰還することを前提としております。従って、必ず死ぬことを前提とする特攻とは作戦の本質が異なります」と述べた上で、防衛大の戦史教官として、これまで学生に「隊員個々が必死の覚悟と国家のために自らの死を甘んじて受け入れる姿勢は、現在の自衛官の服務の宣誓で述べられる『事に臨んでは危険を顧みず、身をもって責務の完遂に務め、……』と同様の考えであり、これは多くの国民を救うため己の身を犠牲にするという崇高な生き様であります。しかし、国家や部隊などの組織が、隊員個々に必然の死を要求することは、引いては国民の生命をも軽んじることに繋がり、作戦の邪道であると教えてきた」と自己の考えを披露。義烈空挺隊の出撃については、「（地上部隊との）提携や生還への思いは見当たりません。このように実際の空挺作戦の現場においては、隊員個々にも決死の覚悟が求められました。実際に、沖縄の地上軍第三十二軍も六月二三日に玉砕しており、（地上部隊と）提携できるか否か、仮に提携できたとしても生還できたか否かは不明……」とし、「義烈空挺隊の壮絶なる突入は内外に大きな衝撃を与えました。義烈空挺隊員の壮絶な犠牲の効果は今日も継続しており、現在の我が国の抑止力の一翼を担っております……改めて感謝と崇敬を表す……」と結論付けた。

参列者全員による献花では、宮本忠一伍長の親族、宮本恵里さんや稲津勝曹長の親族、吉野キヨミさんら八遺族二十人と、健軍駐屯地司令の佐野浩司陸将補や第一空挺団団長の石原由尊陸将補をはじめ第一空挺団や空挺同志会ら参列者が感謝と冥福を誓った。

式典は約一時間で終わったが、終始、緊迫した雰囲気に包まれた。

宮本忠一伍長の兄の孫、宮本恵里さんは「大叔父たちが出撃して希望を託した未来が今実現できているのか、語り合う中で考えて欲しいし、それを平和につなげて欲しい。戦争の悲惨さや平和の尊さを考えるきっかけになってほしい」と語り、松尾支部長は「遺族の方のお孫さんやお子さんが参加された。今後、出来る範囲でちょっとずつ継続するということが一番重要」と話していた。　以上

第58回豫科練戦没者慰霊祭に参列して

評議員　原島淳子

令和7年5月25日（日）、元土浦海軍航空隊跡地であり、海軍飛行豫科練習生の練成が行われた地である、現陸上自衛隊武器学校（茨城県稲敷郡阿見町）内において斎行された第58回豫科練戦没者慰霊祭に、当顕彰会を代表して参列させていただきました。

慰霊祭は、ご遺族・同窓生・来賓等々大勢の参加者が参列する中、式典開始のアナウンスにより、式次第に沿い粛々と進められました。

主催者である、公益財団法人海原会副理事長（式典実行委員長）星指隆氏による開式の言葉に続き、陸上自衛隊武器教導隊隊員による国旗掲揚・海上自衛隊下総教育航空群隊員による儀仗（弔銃）・黙祷・阿見詩吟会師範による奉詠・陸海自衛隊員による献火が行われ、海原会理事長宮本忠明氏による、「本年は先の大戦が終わりを告げてから80年の節目の年、豫科練戦没者の皆様が自らの命に代えてこの国の国柄と故郷の大切な人を守り、今の平和と繁栄の礎を残された事を知らない国民が大多数になった。豫科練戦没者の皆様が残された真実を正しく未来に語り継いでいく事の重要性を痛感している」という思いの込められた祭文と進み、来賓代表による献花・ご遺族代表による玉串奉奠・来賓挨拶・来賓紹介・同窓生紹介と続き、ご遺族代表　乙飛18期　山内一三海軍一等飛行兵曹　姪小澤美好様による、土浦を訪れ伯父様の足跡を辿り、所属していた基地を訪ね歩いた事。そして新しい事実を知った事。それは昭和20年4月13日、出水より九六式陸上攻撃機で出撃、20歳で散華された伯父様は電信担当との事で「我今より突撃す」の電報を打電したのではないかと判った事実を涙涙で話されたご遺族の言葉・阿見町立旭中学校3年佐野心優さんによる若人の言葉・霞ヶ浦高等学校3年池田光輝さんによる遺書朗読・陸上自衛隊施設学校音楽隊による奉納演奏と続き、星指実行委員長の閉式の辞で無事慰霊祭は終了いたしました。

終了後には、参列者全員による菊一輪の献花が行われました。

朝まで降っていた雨が止み行われた慰霊祭、今年は同窓生4名の方の紹介があり各々の方が一言話す時間が設けられた事・「戦争の背景を知ることから始め、他人事では無く自分事として、世界について考えていく事が平和につながればと願っている」と言う中学生による若人の言葉があった事・真柄本人がそこにいる様な思いにさせられた男子高校生による遺書の朗読があった事・ご遺族の言葉を話したのが、昭和40年代生れという若い方であった事等昨年とは異なった試みがみられた慰霊祭でした。

戦後80年、同窓の方の参列も少なくなってしまった昨今、今年いらした方々にはまた来年も在天のお仲間に逢いにこの地に来てほしいそう願って止みません。。

豫科練習生　若くして散華された方達の事を語り継いで下さい。そして沢山の人にこの地にある雄翔館の事を伝えて下さい。一人でも多くの方に来館していただき、昭和の時代にこんな人達がいた事を知っていただきたいと思っています。若くして散った方々のために。

最後にこの句を捧げます。

海空に
　去りゆく君よ
　　花と咲け

千葉県特攻勇士之像慰霊祭に参列して

評議員　原島淳子

令和7年5月26日（月）千葉縣護國神社「あゝ特攻勇士之像」前において斎行された令和7年度千葉県特攻勇士之像慰霊祭に、当顕彰会を代表して石井専務理事と共に参列させていただきました。

千葉縣護國神社

慰霊祭は、神事に沿い修祓・降神の儀・献饌の儀・祝詞奏上と行われ、参列者による玉串奉奠・撤饌・昇神の儀と粛々と進められ、祭主一拝で式典は終了となりました。。

式典終了後竹中宮司より、「終戦より80年の年を迎え、ご遺族も高齢になり遺族会の解散も増えている現状であるが、あの苛烈なる戦いの中で特攻精神をもって散華された英霊の事は忘れてはならないと思っている。若い人達に正しくこの特攻隊の御心を伝えていく努力をしていきたい。今後とも末永くこの慰霊祭を続けていきたい」と言う心と力のこもった言葉がありました。

微力ながらそのお手伝いをさせていただけたらと思います。

時折ジェット音が聞こえてくる中の慰霊祭、この慰霊祭は神社主催で毎年5月26日11時より斎行されております。事前申し込みがなくとも当日の参列は可能です。是非参列しにいらして下さい。

最後にこの歌を捧げます。

満開の　桜の花に見送られ
征きし貴方の　面影偲ぶ

ご挨拶をされる竹中宮司

令和７年度筑波海軍航空隊慰霊の集いに参列して

評議員　原島淳子

令和７年５月24日（土）、茨城県笠間市の筑波海軍航空隊跡地において斎行された筑波海軍航空隊慰霊の集いに、当顕彰会を代表して参列させていただきました。

慰霊祭は、ご遺族・戦友会・来賓等々大勢の参加者が参列する中、開式の辞より式次第に沿い粛々と進められました。

君が代演奏・黙祷の後、主催者であ方子会長による挨拶・ご遺族代表　神風特別攻撃隊第一筑波隊　第13期海軍飛行専修予備学生　福島正次少尉（昭和20年４月６日　２５０キロ爆弾搭載の零戦にて鹿屋から出撃、沖縄周辺アメリカ輸送船団に突入散華24歳　戦死後大尉）甥福島庸介様による伯父様及び父上三兄弟の経歴伯父様の遺書の紹介をされた挨拶・続けて主催者側より改めて福島正次少尉の経歴等の紹介へと進み・来賓挨拶・献花と続き、本年は終戦80周年ということで、前筑波海軍航空隊友の会事務局長南秀利様による「筑波海軍航空隊ここにありき」の碑建立は、沢山の亡くなった仲間たちを慰霊したいという気持ちから行われた等記念碑建立前後の話等々を時に言葉を詰まらせながら話された終戦80年によせての話・橘川栄作様による第13期海軍飛行専修予備学生金井正夫少尉（文通相手の女子学生に送った風防のプレキシガラスで作った飛行機のペンダントが記念館に展示されています）の遺書によせてと進み、陸上自衛隊勝田駐屯地施設学校音楽隊による追悼演奏・閉式の辞で無事慰霊祭は終了いたしました。

慰霊祭終了後、筑波海軍航空隊記念館友の会松井方子会長とお話しさせていただき、会長のお父様（横山保中佐海兵59期）が飛行長であった事、そして飛び立っていく人達に水杯を渡していたという事を聞かせていただきました。「だから遺書朗読の時や隊員紹介の時、この人達にも水杯を渡していたのかと思うと涙がでて止まらないの」と話される会長のお話を聞きながら私も目頭が熱くなりました。10年ほど前でしょうか、「筑波海軍航空隊」と言う映画を銀座の映画館でみたことがありました。その映画こそがここ筑波海軍航空隊の事だったのです。その映画の中で「あと一日早く８月15日がきていれば、死ななくてよい人が沢山いた」と話されていた方の言葉が忘られません。10年経ってもその言葉が頭の中に残っています。機会がありましたら是非ご覧になってほしいと思います。

またこの慰霊祭の会場となった所には筑波海軍航空隊記念館があります。永遠の０等のロケ地にもなった所です。沢山の方にいらしていただき、ここで訓練をし飛び立っていった方々に思いを馳せていただければと思います。最後にこの句を捧げます。

青空に
飛び征く君よ
花と咲け

第55回指宿海軍航空基地追悼式

編集長　金子敬志

令和7年5月27日（火）、第55回指宿海軍航空基地追悼式が鹿児島県指宿市が開催されました。この慰霊祭に参列させて頂きましたので報告致します。

式場は、指宿の観光スポットである「知林ヶ島」の近くにあります。

知林ヶ島の対岸に聳える「魚見岳」の麓一帯に昭和19年1月、水上機の基地として指宿海軍航空基地が開設されました。終戦間際には、この基地から水上機による特攻隊が出撃、82名の方が散華されました。また、基地が爆撃等をを受け１１０名の方がお亡くなりになっています。

本慰霊祭は、特攻隊員及びこれらの方々の合計１９２名をお祀りするものです

九州南部は、5月半ば、全国の一番早く梅雨入りしていました。これは統計史上初めての事だそうです。

昨年が大雨でしたので雨が心配でしたが、当日は、梅雨の中休みか、夏を思わせる天気でした。

式は、戦時中、防空壕を作るために盛り土をして出来た小さな丘の上に設けられた「指宿海軍航空基地哀惜の碑」前で、15時30分から開始されました

受付、左の丘の上に「哀惜の碑」がある。

参列者はご遺族3家族12名を含め約60名でした

式順は次のとおりです。

1　開式のことば
2　黙祷
3　神職入場
4　神事（揖宿神社　宮司）
（1）一拝
（2）修祓
（3）降神の儀
（4）献餞
（5）祝詞奏上
（6）慰霊のことば
（7）玉串奉奠
5　神職退場
6　献奏（ハープ演奏）
7　献詠（詩吟）
8　献花
9　式電披露
10　閉式のことば

式は約1時間で終了しました。

当初、指宿海軍航空基地追悼式の主宰は、指宿市在住の旧海軍出身で組織されていた「指宿かもめ会」でしたが、会員の高齢化が進んだことにより主宰を続けることが困難になりました。

そのため、末永く慰霊祭が存続できるよう、市長を会長とした組織に移行するよう長年嘆願運動を実施されて来られましたが、そのご努力が実り、平成2年4月市長を会長とする「指宿海軍航空基地哀惜の碑顕彰会」が設立され慰霊祭を主宰するようになり今日に至っています。。

指宿は温泉で有名ですが、慰霊碑は温泉街から近い所にあります。また干潮時には歩いて渡れることで有名な知林ヶ島や、頂上から指宿市街や錦江湾を一望できる魚見岳も至近ですので、お近くにお越しの際は「哀惜の碑」もご訪問頂きたいと思います。

沖縄・義烈空挺隊慰霊祭

評議員　髙松真希

令和7年6月7日（土）、この日沖縄本島に於いて全日本空挺同志会沖縄県支部（桃原浩太郎支部長）主催の献花式と義烈空挺隊慰霊祭がそれぞれ斎行されました。

弊顕彰会からは倉形評議員、有志の会員と共に参列しましたので、ご報告します。

当日は梅雨も明け、朝から肌を焦がすような強い日差しと共に入道雲が広がり、辺りは湿度の高い熱気に包まれていました。

平和祈念公園（摩文仁の丘）における慰霊祭に先立ち、午前8時半より、読谷村座喜味の掩体壕の前にある「義烈空挺隊玉砕之地」の慰霊碑で、献花式が行われ、約40名が参列されました。

献花式は参列者全員で黙祷を捧げることから始まりました。続いて献花を行い、そのあとに濱田種夫事務局長が旧読谷飛行場と義烈空挺隊玉砕之地慰霊碑建立について参列者にマイクを使い丁寧に説明をしてくださいました。

その後、およそ45㎞ほどの距離がある平和祈念公園（摩文仁の丘）内の「義烈空挺隊慰霊塔」に各自車で移動し、午前11時より、義烈空挺隊慰霊祭が執行されました。

義烈空挺隊玉砕之地に於ける献花式

「義烈空挺隊」とは旧日本陸軍の空挺部隊です。

大東亜戦争末期の沖縄戦のさなか、既に米軍に占領されている嘉手納飛行場と読谷飛行場（北飛行場）を攻撃し、機能を麻痺させる任務を遂行した特別攻撃隊で、20歳から34歳までの隊員が１９４５年5月24日に熊本県建軍飛行場から出撃し、１１３人が散華されています。

Ｗｉｋｉｐｅｄｉａで「義烈空挺隊」を検索すると、解説の始まりに『義烈空挺隊は、敵飛行場に輸送機で強行着陸して敵航空機と飛行場施設を破壊することを目的とした旧日本軍の空挺部隊で編成された特殊部隊。』と書かれています。

現在、陸上自衛隊の中で唯一の落下傘部隊「第一空挺団」は、その義烈空挺隊の流れを継承している無二の精鋭部隊であると言えます。そのため空挺同志会沖縄県支部の皆様が義烈空挺隊の隊員の気持ちを慮り、日頃から慰霊碑を守り、毎年の慰霊祭を一点の曇りもなく継続されていらっしゃることに、系譜に属する者の使命感がひしひしと伝わってきます。千葉県にある習志野駐屯地から第一空挺団の多数の現職隊員が、この慰霊祭に参列するために沖縄に参集されたことからも、いかに義烈空挺隊に敬意を払われているかを伺い知ることが出来ました。

今回の義烈空挺隊慰霊祭には空挺同志会沖縄県支部、全日本空挺同志会・火箱

芳文会長、第一空挺団髙倉敬副団長、第一空挺団、第15旅団、航空自衛隊救難隊、ご遺族、菊池飛行場ミュージアム、関係団体、有志の方々など、約60名が参列されました。

慰霊祭の式次第は次の通りです。

一、開式の辞
一、国歌斉唱
一、黙祷
一、祭文奏上　（空挺同志会・桃原支部長）
一、追悼の辞　（空挺同志会・火箱会長）
一、追悼の辞　（第１空挺団・髙倉副団長）
一、献花
一、「空の神兵」合唱
一、閉会

そして閉会に引き続き、

一、会長表彰の授与（桃原玲子支部長夫人へ）
一、支部長感謝状贈呈（前田貞夫様、吉野キヨミ様、それぞれ御遺族）

が行われました。

慰霊祭では、「義烈」の碑の前に色とりどりの花で作られた供花が飾られ、その手前に設けられた祭壇には義烈空挺隊員ら6名の御遺影と縁の品物やお供え物（帯、御遺族が出版された本、お菓子など）が並べてありました。

「義烈」の碑

御遺影に写っていたのは義烈空挺隊の5名が稲津勝少尉、井上洋少尉、加藤逸治曹長、山城金榮中尉、渡部利夫中佐（50音順）、そして第三独立飛行隊・操縦機長の町田一郎中佐です。

その中で御遺族がいらっしゃっていたのは、義烈空挺隊12番機搭乗の稲津勝少尉と、義烈空挺隊9番機搭乗の山城金榮中尉でした。

稲津勝少尉の御遺族、吉野キミヨさんは、熊本県からいらっしゃっていました。御高齢でお1人では来られないキヨミさんに、孫の雄志さんがずっとそっと寄り添っていらっしゃったのが印象的で、その思いやり溢れる姿に、いつしか私は稲津勝少尉の姿を想像し重ねて見ておりました。

山城金榮中尉は、沖縄で生まれ育った方でした。

琉球朝日放送が過去に義烈空挺隊に関する番組を幾度か放送しネットのサイトもあり、その中に山城金榮中尉に関する記述があったので一部抜粋しお伝えします。「義烈空挺隊最年長の山城准尉は、享年31歳。突撃の日、新聞記者にこう語っています。『私は沖縄生まれというので特別に関心を持たれているようですが別に悲壮な気持ちはありません。かえって自分の生まれ故郷で戦えるので気易い思いでいます。沖縄県民を救うことができれば本望です。』それが山城准尉の最後の言葉でした。」

さて、ここ平和祈念公園（摩文仁の丘）は、沖縄本島南端に位置し、沖縄戦最後の激戦地となった場所で、沖縄戦終焉の地でもあります。

現在同公園内は慰霊の地となっており、「平和の礎」には、沖縄戦で亡くなられた人々（民間人、軍人、国籍問わず、敵も味方も全て）のお名前が刻まれています。また公園内の「摩文仁の丘」には各都道府県の慰霊塔の他、様々な慰霊碑が建てられており厳かな慰霊の地となっています。

今回慰霊祭を斎行している義烈空挺隊の「義烈の碑」があるのも摩文仁の丘の、海が近い一画です。

慰霊祭が始まってから、供花の花の蜜を吸いに数種類のアゲハ蝶が集まり、式のあいだ色とりどりのアゲハ蝶がひらひらと祭壇の周りを舞い、幻想的な空間となりました。

慰霊祭が終わってから参列者のお１人とご挨拶をさせて頂いた時にその方が「見てください、さっきからずっと蝶が何匹も来ているんですよ。今までこんなふうに思ったことは無かったんだけど、義烈の兵隊さんが蝶になって来ているのかな、なんて今日は思いましたよ。」と静かにおっしゃいました。まだ供花の周りをくねる様に飛びまわる名残惜しそうなアゲハ蝶たちを見やりながら、「きっとそうですね。」そう返事をしましたが、その後その方が長く黙っておられたのでそっとお顔を拝見すると、涙をこぼしておられました。

皆様がそれぞれの気持ちを持って沖縄に、摩文仁の丘に、慰霊祭に、戦跡に、足を運ばれています。

「思い」があるから、資金や時間の工面をしてなんとかしてでも、その思いのある場所に来られているのです。そんなお一人お一人の気持ちの重さが胸に重く響きます。

本日の慰霊祭で平和祈念公園（摩文仁の丘）に到着した際には、このような場面にも遭遇しました。午前中とはいえ10時半ともなると日差しがますます強くなっており気温も湿度も高い中、何十人かのグループの方たちが、滝のように汗をかきながら園内一帯の清掃作業に一丸となり取り組んでおられ、その中の数人が今回の慰霊祭の参列者と親しそうに話をしている姿が見受けられました。聞いてみると、この清掃作業に来られている方たちは皆さま現職の自衛官だということです。休日を返上し、定期的にボランティアで来られているそうで、真っ赤に日焼けをし汗だくになりながら「１つ１つの慰霊碑やここの歩道をきれいにすることが、戦争で亡くなられた方々に自分たちが出来るせめてもの事です。」としっかりとした口調で仰るその言葉に、感銘を受けました。なにごとも言うは易く行うは難しいものです。何かを心に思ったのなら実行に移す、そんなこともこの慰霊の地で今回学ばさせて頂きました。

テント内に設けられた参列者席

多田野語録
「人間における運の研究」
株式会社タダノ最高顧問　多田野　弘

今回は、運の研究という課題である。運とは人知ではかり知れない身の上の成り行き・めぐりあわせをいう。誰もが運に恵まれ、よりよい人生を過ごしたいと願う。

運には「運が向く。運の尽き・運は天にあり・運を天に任せる」などの成句がある。多くの人は運や運命を「決められたもの」で生涯動かすことができないと解釈している。しかし、それらは天の配剤であると同時に、人間が受け取り、つくるものであると私は考えている。例え運が悪くても、それをどう受け止め、どう対処していくかで、限りなく変えられるのである。

私の１００年余の生涯を顧みたい。私を機械技術者の運命へと方向づけたのは、小学校を終えるころ、父から大阪の職工学校への進学を勧められたことに始まる。いつも慈愛のこもった眼で見守ってくれている父からの勧めは、深い考えの下にあったのだろう。競争率が８倍の府立学校だと知り入学を決めた。

次に卒業１年後、海軍に志願を決めたことであった。甲種機械科卒で海軍にて航空機整備に従事すると３年の兵役が１年で済む新しい制度が発表された。私は早く社会で実力を発揮したいと、昭和14年 10月横須賀海軍航空隊に入隊した。19歳だった。海軍は殴って鍛えるところだと聞いていたが、入隊した横空練習部は、聞きしに勝る猛訓練だった。３年かかる基礎訓練を１年で済ますのだから当然だった。訓練に際し、私たちの行動を見ていた教員から「動きが鈍い、気合が入っていない」と大声で叱正され、鉄拳の制裁が下る毎日だった。１年の基礎訓練が終わった時、鏡の中の自分を見て驚いた。見違えるほど顔つきが引き締まっており、逞しくなっていた。いかなる困苦欠乏にも耐えうる自信ができたように思った。運命は自分でつくるものだと感じ入った。

基礎訓練終了と同時にいったん予備役となって帰郷したが、翌16年10月召集令状により、矢田部航空隊に入隊した。２か月後、私を待っていたかのように日米開戦となった。最前線で戦闘に参加したいと上司に申し出た。隊員では私独りだった。

戦場に向かう途中、船長の機転で開戦直後に海軍が占領したウエーキ島に寄港してくれた。米軍捕虜が滑走路修復で運転する米国製の土木建設機械がすべて油圧で動いているのが、私には分かった。職工学校で学んだ基礎知識があり、既に日本の航空機の油圧機構を知っていたからだ。

その後、南の戦場での３年間は、生死を分ける凄まじい日々であったが、生き抜いた。それは自力でなく、大いなるものに生かされていた。その体験から、自分が宇宙の意志を帯びた魂の存在であることに気づかされ、生涯を魂主導の生き方で歩むようになった。

戦後、父と弟の３人で、焼け跡に建てた24坪の小規模の機械修理工場を始めたことが、私の運命を決定づけた。国内の復興の機運と相まって、仕事は増えていった。そうするうちに、天の配剤であろう開戦当初に見たウエーキ島の光景が思い出された。「ダメ」でもいい、油圧を利用した荷役機械をつくろうと、寝食を忘れて取り組み、試作機を完成させた。これが今の我が社の礎となった。

私は持ち前の独立自尊の精神で、あえて安易ではない道を選んできた。振り返えると、人生には「幸運」や「不運」に見えるけれども、「人間万事塞翁が馬」の例えのように、幸運の裏には災いの種が潜んでいるし、不運と思われる中に幸運の種が隠されている。例え悪い出来事であっても、その対処の仕方によって変えられ、新しくつくり得ると私は確信し

ている。自らの生涯を振り返り思索すると、運は自ら招き受け取り、運命は自分がつくるものだといえる

多田野語録
「磨すれども磨がず」
株式会社タダノ最高顧問　多田野　弘

今月の表題「磨（ま）すれども磨（うすろ）がず」は、孔子が当時の諺として紹介している。真の意志を持っている者は、どんな抵抗・障害にあおうとも志は決して挫けない。そういう不撓不屈の強い意志を、あなたは持っているかと問うている。

顧みれば私の生涯に、強い意志がつくられた機会が二度ある。その一つは、徴兵1年前20歳の頃、海軍に志願入隊したことである。海軍は殴って教える所だと聞いていたが、入隊した横須賀海軍航空隊練習部は、聞きしに勝る凄さであった。

私たち入隊者の動きを見ていた教員から、いきなり「動作が鈍い」「気合が入ってない」と叱正されると共に、顔つきが変わるほど鉄拳の制裁を頂戴した。親からさえも叩かれたことが無いので、よく応えた。普通3年かかる徴兵義務を、1年で済ますのだから当然と思うと共に、私たちを鍛えてくれているのだと、受け取っていた。

訓練を終えた1年後、鏡を見て驚いた。自分ではない、引き締まった顔の逞しい姿が映っていたからだ。その顔には、不撓不屈の精神が漲っていた。

もう一つは訓練後3年間の戦場体験である。死と直面する日々に自分が魂の存在であるのを知り、自分に死を受け容れさせたことである。その偉大な力は、宇宙の意志が魂を動かしたからだと直観した。以来、魂主導の生き方で、心と身体を統御・支配し、不撓不屈の強い意志をもてたことを今も誇りに思っている。

言うまでもなく、私の戦後の生き方を一変させた。魂主導の生き方が、元日の寒中水泳を29年間続けたことや、このエッセーを26年余継続できていることにもつながっている。しかも、それが現在の長寿と健康をつくったといえるだろう。

もともと精神というのは、肉体のように形があるわけではないから、鍛えて強くすることはできない相談である。ならば、不倒不屈の意志を強くするにはどうすればよいのだろうか。一つは、その意志が身体のどこから出たかによって、決まるといえる。心でつくった意志は弱く、魂がつくった意志は強いのである。

なぜなら、心は自分がつくったもので、生れた時には無かった。2・3歳頃から言葉を憶え、物事と言葉を合わせることから考えるようになり、それが理性となって心の大部分を占めているのである。

故に、心は理性の合理的にしか考えられない欠点を持っており、信じるとか愛するという「感じる」領域には、盲目同然といえる。しかも、有利な方へコロコロ変わる欠点もある。魂のみがどんな抵抗・障害にあおうとも決して挫けない意志をもって、私どもを正しく導いてくれるのだと私は信じている。魂の分身である良心が、心の偏りや行き過ぎを正す強い力を持っているからだ。

いずれにしても、魂主導の生き方が私の人生を、豊かな心と幸せに充ちたものにしてくれたといえる。宇宙の意志［天］に対し、いくら感謝しても尽きない。

多田野語録
「読書立国」
株式会社タダノ最高顧問　多田野　弘

「読書立国」とは、読書によって国を立派にしていくことをさす。企業の経営は人なりといわれるように、国をよくするのも人である。読書は人を磨き成長させる。私の生涯を振り返り、読書について考えてみたい。

幼年の頃、文字を読めるようにった私に、父は絵本「グリム童話集」を、そっと渡してくれた。暖かい気持ちを感じながら読んだのが読書の始まりだった。たえず読みたい本を手元に置いて、手に取るようになったのは戦後である。多くの本に触れ、学びの喜びを知った。感じいった部分には線を引き、抜き書きをして振

り返れるようにしている。

その中で、私の生涯を導いてくれた著書がある。企業経営については、Ｐ・Ｆ・ドラッカー、人生の指針としてはソクラテス、トメレストイ、フランクルの３哲人の書である。

まずドラッカー著「現代の経営」から記す。戦後、焼け野が原になった郷土に復員し、父と弟と３人が、24坪のバラック建ての工場で、焼損機械の修理を始めた。我が社の始まりであり、25歳の時だった。80年後の今日、従業員４９１６人になり、年生産売り上げ３０００億円という成長を遂げている。

寝食を忘れ油圧クレーン試作品を作った後、次々に注文が舞い込むようなった。私は社長を任され、会社経営の在り方に悩んだ。その時に出会ったのがドラッカーの著「現代の経営」である。そこには、企業経営の目的について記されていた。利益のみを追求していけば、その企業に関わるすべての顧客並びに従業員は、利益追求目的の手段にされてしまう。目的は、社会に貢献することであり、その貢献度に相応して、社会から利益が与えられるという。

悩みぬいていた私にその経営哲学が、腹の底まで浸み込んだ。この考えで経営ずるなら、たとえ企業が潰れても惜しくないとまで思った。私が南の戦場で生き残れた恩に報いたいという思いにも、一致していた。

一躍勇気を得た私は、その哲学を次々と具現化していった。まず「タイムレコーダー、出勤簿」の廃止から始まり、続いて全員月給制に変え、週休二日制にもした。この英断は四国では最初だった。人間は監督をされてはならない存在である。社員を信用し、自主性に任せたことによって、少数の遅刻と欠勤がピタッと止まったのである。これは我が社の自主自律の美風・文化となって、大きな精神的資産になっている。

次に、私の人生に重大な示唆を与えた３哲人の書について記す。80数年前、日米戦争の激戦地ラバウルで、戦闘機の整備下士官として参加していた。23歳だった。激しい戦闘で、毎夜「今日は無事だったが、明日は分からんぞ」と言い聞かせて眠る日が続いた。ある深夜「びくびくせずに潔く死ね」という声が心の奥から聞こえた。天啓だと感じ、同じ死ぬなら、前から撃たれて死のうと心に決めた。それ以来、弾雨の中を平気で行動する自分を発見した。天啓を聞いたのは心ではなく魂だったと直観した。強く心で決め、覚悟しても、死を受け容れることは到底できない。ラバウルの死闘で自分が魂の存在であることを知り得た。

戦後に読んだ３哲人の書が魂の存在を証明していた。ソクラテスの高弟子のプラトンの書「ソクラテスの弁明」に、彼は紀元前４５０年の頃、「魂を養い、徳を高めよ」とアテネ市民に説いて回っていたと記している。

また、心理学者のフランクルはユゲヤ人のため、ナチスに捕われ、アウシュビッツ収容所に容れられ、戦後、その体験を書「夜と霧」に発表した。収容所では極限に追い込まれながらも、何人かの崇高な行動を見た。人間のどこから、自らの命をさしだすような行動が出るかを考え、それは人間の超越的無意識のなせる業であり、東洋でいう魂であると説いている。文豪トルストイはその書「人生の道」に、「魂は肉体に宿り、心と身体を統御日支配する」とある。３人の先哲がそれぞれ著書で、私が直観した魂の存在を明記しており、確信を得た。戦後は、言わずもがな、体験で得た。魂主導の生き方を始めた。それは克己の生き方であり、自分に勝つことに喜びを齎した。

読書することは、先人からの様々な学びを得て、自分の生き方を見つめ、自分の道を切り開く智慧を受け取る「読書立志」であり、ひいては「読書立国」であるといえる。読書は元気溢れる１０４歳の今日を迎える原動力になっている。感謝して止まない。

令和７年航空神社例祭に参加して

理事　國分　雅宏

令和７年４月13日（日）、降りしきる雨の中、埼玉県所沢市小手指元町にある北野天神社（正式社名は、物部天神社・國渭地祇神社・天満店神社）境内にある航空神社（小手指神社の社屋内）例祭が挙行された。昨年は航空神社前に祭壇を設けたが、今年は雨天のため北野天神社本殿内での実施となった。

この「航空神社」は、所沢市にあった所沢陸軍飛行学校において、靖国神社に祀られなかった航空殉職者の慰霊と空の安全を祈り昭和12年９月に創建された。昭和13年６月に同校が陸軍航空士官学校分校となり入間郡豊岡修武台に移転したことで同地に奉遷され、国家の安寧と戦勝祈願のため北野天神社宮司により毎年祭典が実施された。しかし、終戦後の進駐軍の災禍を避けるため、昭和20年９月３日、当時の陸軍航空士官学校長の発意で、御霊と社殿等を北野天神境内に奉遷、同年11月３日に陸軍戦死戦没者慰霊祭を実施、昭和30年頃には周辺地域の戦没者が合祀された。その後、諸般の事情により昭和40年11月に軍関係の御霊のみ航空自衛隊の幹部候補生学校教育参考館に碑として移された。

残された御祭神と御霊は「小手指神社」として引き継がれ毎年４月15日に慰霊祭が営まれた。

一方、奈良に移されていた４，９５６柱の霊璽、霊名簿等は、昭和63年２月に修武台記念館の整備に伴い入間基地に奉還されていたが、北野天神社栗原宮司による現状確認依頼を受け令和６年３月13日、入間基地から再び奉還され、北野天神社で「航空神社遷霊祭並奉遷祭」が斎行され59年ぶりに元の宮に戻った。北野天神社境内には「小手指神社」と「航空神社」が同じ社殿に鎮座されている。

令和７年４月13日の「航空神社」例祭は、朝から生憎の雨となったが、「北野天神社（栗原迪子宮司）」の主催で実施され、雨音の中、11時に開会となった。修祓、宮司一拝の後に、献饌、祝詞奏上、宮司による「朝日の舞」奉納、玉串奉奠に続いて各参列団体代表による玉串奉奠、撤饌、宮司一拝と厳粛に進行され、11時50分に終了した。参列者は昨年の倍となる約50名であった。

本殿右側に設けられた例祭受付

関係者によるお茶会

引き続き、例祭関係者により本殿内に席が設けられ、お茶会が実施された。お茶会は、栗原宮司による挨拶で12時に開始され、所沢市長、入間基地司令、航空救難団司令、修武台記念館関係者、統幕学校教務課長等の航空自衛隊関係者、自衛隊ＯＢ組織である埼玉県隊友会入間地区協議会会長及び入間つばさ会会長等、神奈川大学及び国学院大学大学院関係者、入間航友会会長、地元自治会長等約50名が参加した。また、昨年の例大祭に参加した地元の有志が作成した実物大の「アンリファルマン機」の模型が奉納された。「航空神社」例祭は、今後も４月15日直近の休日に実施される予定である。また、例祭に合わせ境内にある展示場では「航空神社と北野天神社展」に関連する文書・写真等が展示されていた。

「航空神社」に祀られている御祭神は、主祭神は天照大御神、神武天皇、明治天皇、・霊璽、霊名簿：（大正２年～昭和19年８７０柱、・陸軍特攻戦没者：（比島方面飛行部隊）２５２柱、（比島方面挺身隊）４５７柱、（南方方面（比島除く）飛行部隊）65柱、（台湾・沖縄方面飛行部隊）２３５柱、（九州・沖縄方面飛行部隊）７８０柱・陸軍航空　特攻・本土方面飛行隊55柱、少年飛行出身者３８２柱、終戦時自決烈士78柱、明野飛行学校関係１，６５１柱・熊谷飛行学校関係１１７柱・陸軍少将加藤建夫以下14柱（祭祀に証左あるも氏名不詳）となっている。

また、昭和14年７月に開校した「（所沢）陸軍航空整備学校」で少年飛行兵、下士官、幹部候補生への整備教育を実施していた。その校内神社として昭和18年４月４日に上棟された「建空神社」があり、航空整備学校関係者の殉職者等を祀り、昭和20年９月３日に北野天神社境内に奉遷されてきたが、昭和34４年の伊勢湾台風により社殿が崩壊・喪失したとのことである。（昨年の特別展による。）

航空神社前のアンリファルマン機の模型

航空神社全景（晴天時に撮影）

大宜味村「慰霊と絆と感謝の日」

理事　宮本雅史

八十年前、日本軍が大規模に展開した特攻作戦の戦死者は六千三百七十一人（特攻隊戦没者慰霊顕彰会の調べ）に上るとされるが、遺体が遺族の元に帰ることがないばかりか、戦死した正確な場所すら不明のままだ。そんな中、昭和二十年春から連日のように特攻機が出撃した沖縄で、住民が海辺に打ち揚げられた特攻隊員の遺体を収容、弔ったことがきっかけで、七十余年、遺族と住民との交流が続いている。特攻隊員の遺体が収容された四月六日を「慰霊と絆の感謝の日」と呼び、献花祭（慰霊祭）が地域の恒例行事になっている。

芭蕉布で知られる沖縄県大宜味村喜如嘉の農村環境改善センターの広場で、今年も四月六日、小さな集いが開かれた。

（心篤き　人ら住めりと　この岸に
　導かれけむ　兄がからかも）

と刻まれた歌碑の前に十五人の住民が集まり、前田貞夫区長（七十七歳）のあいさつに続いて、歌碑建立当時の区長だった大山美佐子さん（七十三歳）が歌碑に花を供えた。

碑文にある「兄」とは、沖縄戦で二十歳で戦死した寺内博中尉（戦死後、少佐に）。歌の作者は少佐の妹、浅野綾子さん（令和元年死去）だ。

寺内少佐は昭和二十年四月六日、第1八幡護皇隊の指揮官として鹿児島・国分基地を出撃。米軍が上陸した沖縄・読谷村を目指す途中、伊平屋沖で米軍機と交戦し、散華した。少佐の遺体は地元住民の手で引き揚げられ埋葬、その後、荼毘にふされた。

当時の一連の様子を記した同村庶務課職員、神山敦三さんの報告書が残されている。

■　■

遺骨について

一、戦死の日時、場所及戦況
　昭和二十年四月六日午後一時頃、於東支那海伊平屋沖の米艦隊との激烈な空中戦斗

二、漂着の日時及場所
　四月七日午前十一時頃　對岸の大宜味村喜如嘉区海浜

三、埋葬迄の概況
　四月七日警防団員に依り安全地帯へ安置セるも当日、米機の低空偵察絶間なく埋葬作業不能の止むなきに至り翌八日

慰霊の歌碑
心篤き　人ら住めりと　この岸に
導かれけむ　兄がからかも

夕闇を利して納框の上埋葬完了す
四、遺骨還送に至る迄
一九四九年十月十五日其の筋の命に依り洗骨一部火葬の上村役所へ安置す

遺留品について

一、埋葬の際保管セる遺留品左記の通り
記
1、名刺一一点（友人七枚　本人四枚）
2、便箋用紙一枚（餅六個頂戴ニ及候　寺内博）鉛筆手記
3、現金五百四拾九円六拾五銭也

付記：現金は当時の大宜味村警防団第一分団長、神山敦三保管中なりしもＢ軍票と交換の命令で交換後同人保管中なり。和気部隊と判明セるは正装の俘漂着セる爲　航空服に記録されしに依る

■　■

「当時、沖縄には日本軍だけでなく米軍の戦闘機も飛んできたから、村では警防団（防備隊）を作り、山の上から見張りをしていた。その時、特攻機が墜落するのを見たのでしょう。遺体が海岸に漂着するのを見て、収容しようとしたけれど、米軍の戦闘機が飛んでいるから身動きが取れない。夕方になってようやく引き揚げ、近くに埋葬したのです。最初は米兵だと思ったようですが、近くで見て日本兵だと分かったようです。歌碑には住民の寺内少佐への慰霊の気持ちと、遺族の喜如嘉の住民への感謝の気持ちが刻まれている」

当時八歳だった元区長の平良景昭さん（八十八歳）は当時の様子と歌碑の意味をこう説明した。

集いに参加していた女性は、「九十歳の地元の女性はその日の事を昨日のことのように覚えていて、『自分は小学校６年生だった。米軍機が四機、友軍機が三機だった。友軍機はどんどん撃ち落さるのを見た』と当時を偲んでいた」と話した。

歌碑が建立されたのは平成二十四年五月二十六日。だが、地元住民と寺内少佐の遺族との交流が始まったのは昭和二十八年までさかのぼる。

遺骨が還送された後、喜如嘉の住民が上京して綾子さんに遺品を届けた。これがきっかけで、昭和四十二年五月には、綾子さんが喜如嘉を訪れ、少佐の墓に墓参。五十二年四月一日には、少佐の三十三回忌で綾子さんが家族五人と喜如嘉を訪ね、住民と慰霊祭を行った。その際、綾子さんが住民への感謝の歌を詠んでいるのが伝わり、歌碑の建立計画が持ち上がった。平成二十四年五月二十六日、歌碑が建立され、綾子さんは除幕式と懇親会に招かれている。綾子さんは、歌碑に刻まれた歌以外にも

〈ふるさとにも　似たるおもひをわが持てり　心やさしき人ら住む島〉

と喜如嘉の住民への感謝の心を残し、歌碑が建設された際には、地元住民がウスデークを舞い、お祝いをしたことを

〈吾が歌碑を　建て給ひたるさとびとの　喜如嘉ウスデークめぐり舞いつつ〉

と、詠んでいる。

前田区長は「歌碑の除幕式には村長や教育長だけでなく、子供達も来て盛大だった。四月六日の感謝の集いにはＰＴＡが子供を連れて来ることもあった。今は子供たちは学校の部活などがあって来れないが、最初は親が子供たちに呼び掛けて集まった。特攻隊の事も子供達には話した」と住民と遺族との親密な関係を力強く語った。

×　×

少佐の遺骨や遺品を受け取った綾子さんはたびたび沖縄を訪ね、喜如嘉の住民と親交を深めたとされる。歌碑の建立後、交流は大宜味村全体に広がっていった。

「歌碑には、喜如嘉には『心篤い人』が住んでいると書かれている。村人にとっ

て感激する言葉で、子供や孫に伝えたい」と平良さん。大山さんも「綾子さんは『兄は海の藻屑になっていたはずなのに、喜如嘉の温かい人たちに遺体を引き上げられ、守られてきた。米軍が攻めてくる中、本当は逃げなければいけないのに…』と感謝し続けてくれていた。うちの村は立派だと思う。歌碑を建立する際には反対の声はなかった。除幕式は区をあげて村民が自主的に集まった。今、平和教育で、ここを見学するのもいいと思っている」と続けた。前田区長も「感謝の集いという日があることを知らせていくことは重要だ。４月６日の感謝の日は最低限、続けていきたい」と話した。

一方、綾子さんの長女、松永祥子さん（六十三歳）は、「母は叔父（寺内少佐）とは一歳違い。生前、『沖縄の方々に遺体を埋葬して頂いた上、遺品まで手元に戻ってきた。有難いことだ。沖縄にはとてもお世話になった』といい、本土復帰前から沖縄には何度も通っていました。私も母に連れられて色々な方とお目にかかりました。歌碑は沖縄の方々に感謝する歌です。今年は体調がよくなく参加できませんでしたが、母と同じように喜如嘉の方との交流は続けていきたい」と話した。

沖縄では先の大戦にさまざまな見方がある。だが、喜如嘉での小さな集いは、戦争の記憶と人々の間にできた絆を「感謝と慰霊」という形で継承する場となっている。

開式を待つ参列者

大山美佐子さんによる献花

読谷村喜名の「梯梧の塔」について

評議員　髙松真希

令和7年5月30日午後3時から読谷村喜名の「梯梧之塔」と「さくら之塔」の碑の前で、読谷村喜名自治会主催の慰霊祭が斎行され、ご遺族や喜名に住む方を中心に約60名の参列者が集まりました。

私は特攻隊戦没者慰霊顕彰会からではなく、個人的に参列させて頂いたのですが、その後、日を改めて読谷村喜名自治会の安里哲自治会長から話を伺う機会を頂き、「梯梧之塔」が義烈空挺隊にも関係があること、また、喜名という地区のことや、区民の方々が梯梧之塔に持たれているお心についてたくさんの方に知って頂きたいとの思いに至りましたので、この場を借りてご紹介させて頂きます。

手前「梯梧之塔」、奥「さくら之塔」

この記事を書くにあたっては、安里哲自治会長から伺ったこと、「梯梧の塔慰霊祭」で配布された資料（宮平良秀氏の著書『戦場の村』より一部抜粋）、喜名誌などを参考にしました。快くご協力くださいました安里哲自治会長に、この場を借りて厚く御礼を申し上げます。

（注）「梯梧の塔」と「梯梧之塔」、文中では両方の表記のしかたで使い分けをさせて頂きました。

「梯梧の塔」は、現地に於いて慰霊祭の名称や文献で使用されています。

「梯梧之塔」は、梯梧の塔に刻まれている書き方です。

読谷村喜名は、北飛行場があった座喜味集落の隣に位置する集落で、面積は4,912㎡です。

喜名集落を分断するように国道58号が南北に走り、現在「梯梧之塔慰霊碑」と「さくら之塔慰霊碑」はこの58号線の西側にある小高い丘の上に並んで建立されています。ふだんからこの碑やその周辺はきれいに掃除、手入れがされていて驚くのですが、それは喜名自治会の方々や区民、そして有志の方々が、月に一度清掃活動を行っているからだと知りました。

先ほど「喜名は国道58号線に分断されている」と書きましたが、これは言葉の通りであり、58号線を堺に東側は嘉手納基地の弾薬庫となっており、正式には公表されていないもののその面積は約1,052㎡と言われているようです。その弾薬庫の周囲にはフェンスが張り巡らさ

慰霊祭会場

れ、立入禁止区域になっているのです。

実は終戦まで喜名の集落は、今では人が入れないこの弾薬庫の地域内に存在しておりました。

昭和22年12月のことです。

それまで米軍により収容所に抑留されていた喜名の一部の住民に、帰還許可が出ました。長期に渡り過酷な生活を強いられてきた住民は、疲労と絶望の淵からふいに湧き上がった希望を胸に、老人たちは故郷に帰れる喜びに最後の力を振り絞り、はやる気持ちで懐かしの集落に帰って来たのです。

しかしそこには、あったはずの我が家は無く、集落は忽然と姿を消していました。戦後、家々は米軍に全て焼き払われ、見渡す限りが瓦礫、その瓦礫を覆うように生い茂る雑草、そして草むす屍と化した、戦争の犠牲になられた村民や兵士の白骨化したご遺体が見るも無惨に随所に散乱していたそうです。その光景を目の当たりにした喜名の住民は、再び喪失感にさいなまれます。

それでも、瓦礫やガラクタを拾い集めて材料にし、簡易的な炊事場づくりを始めると、この土地でもう一度生きるため、生活を取り戻すために歯を食いしばって復興に向けて歩き出す決意を固めたのでした。

ご遺骨の収容を始めたのは、翌年、昭和23年５月のことです。

喜名の青年会が主体になり、２～３人で１組になり、区域分担を決めてご遺骨を収集されたそうです。

ご遺骨を集めては川で洗い、集めては川で洗いを繰り返し、そのうち川の水が白く濁るほどでした。それもそのはずで、当時この地域だけでも４～５００柱のご遺骨が田畑の中に埋まっていると言われていたそうです。

こうして収集したご遺骨は、泉川橋の近くの天然の洞窟に安置されました。

ご遺骨の収容はそれから２年が経った昭和25年になるまで継続的に続けられたそうです。また、個人による収骨に至っては、それから何年にも渡り随時行われておりました。

そのうち、隣の座喜味集落からも、収集したご遺骨がこの洞窟に持ちこまれるようになりました。戦没者のご遺骨を納める場所は、この地域一帯にはこの洞窟以外にはなかったからです。

この洞窟には慰霊碑が建立され、碑建立の祈念として梯梧の木が植えらたため、慰霊碑は「梯梧の塔」と呼ばれるようになりました。この時点で、この洞窟に納められたご遺骨は７００余柱、そのうち名前が判明している方は僅か20余柱でした。

梯梧之塔

その後、梯梧の塔の慰霊碑や洞窟を含む、喜名の集落全てが嘉手納基地の弾薬庫となり、立入禁止区域となってしまったのは前述の通りです。

喜名は国道58号の西側に集落を移すことを余儀なくされました。

洞窟の中に安置されたご遺骨と梯梧の塔も、昭和31年7月に現在の地に移転され、その後、碑は新しく作り直されましたが、参拝や清掃、慰霊祭は続けられ、それは今日まで継続されております。

因みに「さくら之塔」には、喜名集落の住民の中で戦死が判明された方々１６７名が刻銘され、「梯梧之塔」には、現在でも７００余柱の方々のご遺骨が納められております。

「梯梧之塔」の後ろにある碑には、「梯梧之塔沿革」「再建」「沖縄戦無名戦没勇士七百余柱の霊」がそれぞれ刻銘されています。

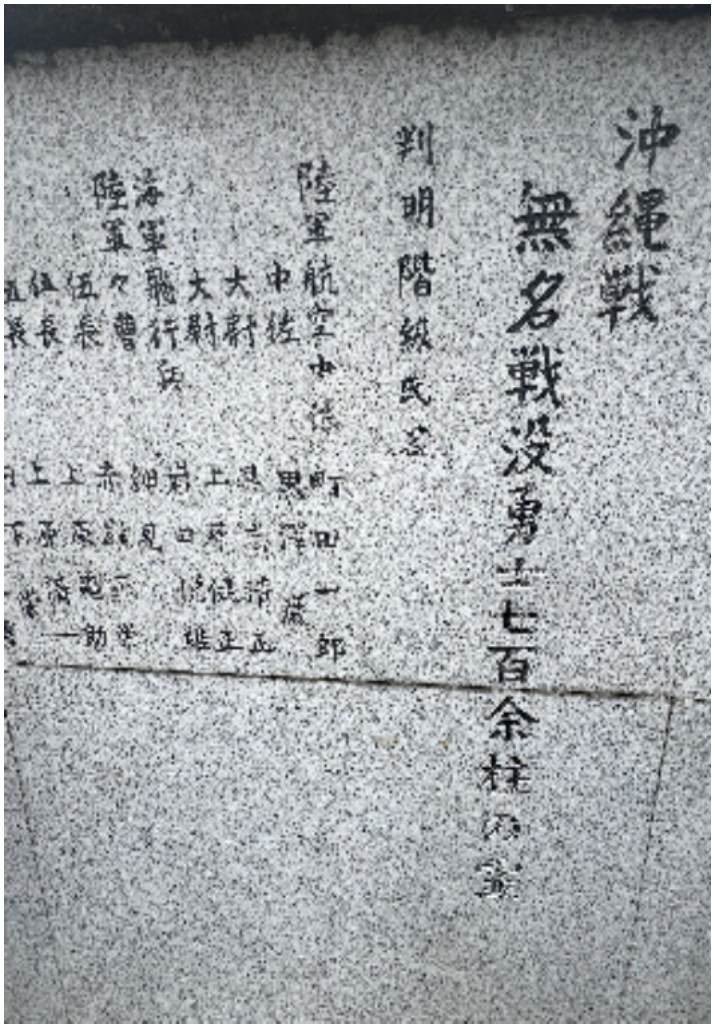
「沖縄戦無名戦没勇士七百余柱の霊」の横には「判明階級氏名」と刻まれており、名前が判別した兵隊33柱の階級と氏名が銘記されており、その１番最初に刻まれているのが、陸軍航空隊・町田一郎中佐（出撃時は中尉）の名前です。

町田一郎中佐は、第三独立飛行隊に所属しており、義烈空挺隊が九七式重爆撃機に乗り建軍から出撃して読谷飛行場（北飛行場）を攻撃する時の、四番機の機長でした。

読谷飛行場の強行着陸に成功したのはこの四番機が唯一であり、読谷飛行場に胴体着陸をすると敵の戦闘機２機、輸送機４機、爆撃機１機を破壊します。更に26機に損傷を与え、ドラム缶６００本の集積所２か所を爆破、７万ガロンの航空機燃料を焼失させました。

今年６月７日の、読谷村座喜味にある「義烈空挺隊玉砕之地」の碑の前での献花式と、平和祈念公園（摩文仁の丘）内の「義烈空挺隊慰霊塔」前での慰霊祭の際に祭壇に置かれた御遺影の１つに、その町田一郎中佐のお顔がありました。

群馬県生まれの陸軍士官学校56期、26歳で義烈空挺隊と共に沖縄県読谷村にて壮絶な最期を迎え、数年の時を経て読谷村の村人に御遺骨が収容され、身元が判明され、喜名にある梯梧之塔に名前が刻まれるに至った義烈空挺隊の関係者は、町田一郎中佐ただお一人だけです。



判明階級氏名の第１行目に町田中佐の刻名がある

特攻隊員へのインタビュー

会　員　中川　法宏

海軍特別攻撃隊　第三正気隊
江名武彦少尉

一回目の特攻出撃

正気隊は６機ですが我々の同期生が操縦４名、偵察２名です。６機で18名ですがそのうちの６名が同期（予備学生14期）ですからお互い励まし合っていたんでかなり恵まれてたでしょうね。

私の場合は４月10日に特攻命令が出たんですけどね、辛い胸の内、死と向き合ったですよ。いくら覚悟を決めていても本能的な物を抑えることに苦労する訳ですけども死というものは人に代わってもらえるものではないですからね。自分で解決しないといけないわけです。ですからそれぞれがその人なりに解決していくということで、死に対してお互いに語り合うってことは無かったですね。

１度目の出撃は串良から特攻出撃の儀式をして飛び立ちました。私の顔が引きつってたんでしょうね。電信員の前田二飛曹から「分隊士、笑って死にましょう」なんて言われました。前田さんの場合は中学在学中、甲13期で、操縦の梅本二飛曹も特乙ですから予科練の人はいろいろ悩みもあったんでしょうけど激しい訓練も受けてますし勇ましいんですよ。立派な戦士になってるんですね。我々は学生上がりですから（江名氏は早稲田大学在学中学徒動員）娑婆っ気があってなかなか未練を断ち切れないわけなんですね。恐らく私は出撃の時、自分の故郷に向って親族にお別れをして、自分の棺となる飛行機に駆け足でかけて行く時、なかなか平常心じゃなかったんでしょうね。彼らは勇ましいし、それだけ純粋だったんでしょう。覚悟をしたつもりでも態度に出てきてたんでしょう。彼らからはそう見えたんだと思いますよ。

飛んでいる間はいろいろやることがあ

百里原基地にて

りますからね。考えるという事ではないんです。特攻隊は帰って来なかった人を言うのであって私みたいな帰ってきた者に対して言うのは僭越です。使っちゃいけないですよ。

　串良から出撃した部隊は２つありまして特攻攻撃と雷撃隊があります。雷撃隊は雷撃して帰ってくる。特攻隊は突っ込んでくる。地図に帰りが描いてあるのは雷撃のチャートなんです。我々のチャートは帰りが描いてません。ただし実際に串良から飛び立ったら雷撃隊もほとんどは帰って来ないんです。３回出れば３回目には必ず戦死するってほど、向こうの対空砲火がすさまじいってことで、帰り路は書いてあるけれども実際には帰って来れない。偵察員としては飛行機を正確な進路、方向に導かなくてはならない。操縦員はエンジンの調子を絶えず気にしなくちゃいけない。電信員は途中で電探防止のために銀紙を撒く準備をしなくちゃいけないし、いよいよ突入する時には通信しなくちゃいけませんから通信機の状態を調べておく必要がありますし、機銃も備えてますから応戦する機銃の準備もしておかなきゃいけない。この辺のことは飛行作業に懸命になってた時にエンジン故障が起きましたので考える余地がなかったんですよ。一回目の出撃は知覧に着陸しましたが２回目の時には洋上ですし、島がたくさんありますが島から離れたところを飛行してました。

　二回目の出撃は相撲で言えば取り直しですよね。またシコを踏むでしょう。それが大変なんですよ。一度は覚悟を決めたものの、生き残ったっていう運命的な喜びですよね。だから二回目のほうが大変なんです。みんなそう言ってますよ。百里の基地に赴任したとき雷撃隊隊長の所に赴任の報告に行ったら「お前たちは生きて帰れない」そう言われてましたからね。知覧から串良に戻りましたけど予科練の二人はあっけらかんとして次の出撃に対して自分を鼓舞してましたね。その辺が違うんですよ。教育が違うんでしょうけど予科練は鍛えられてるんですよ。

　菊水作戦は航空機による作戦です。鹿屋にある五航艦の司令部が指揮をしてるんですけどその時は陸軍の６航軍も鹿屋の五航艦の指揮下にあるんです。それで第一回が４月６日です。私が串良に赴任したのが４月20日で、もう２，３日中に出撃命令が出ると様子がわかってたから覚悟を決めてたんですが前線が停滞していて４月16日から28日まで特攻出撃ができなかったんです。20日に赴任して特攻命令が今日出るか明日出るか、毎日がそんな心境です。特攻戦死した戦友の日記を見ると「今日も生きた。」としか書いてないですよ。毎日毎日。４月27日、菊水４号作戦が発令されました。艦攻特攻は百里が６機、宇佐空と姫路空があわさって28日は宇佐空、姫路空はすんなり出撃で来たんですけど百里空は６機が待機して、午後その後を追っかけるんですけど、一番機がエンジン不調で出れず、二番機もエンジン不調。それまで老朽機を整備

９７式艦上攻撃機　百里空所属機

して百里原から乗ってきたんですけどその時は爆弾も積んでないんです。それが出撃の時には８００キロ爆弾を積んで出るわけですが爆弾積んだ経験のない者ばかりですから離陸できないんです。三番機は爆弾抱えてヨタヨタ離陸して飛び立ったんです。４番機はすぐ引き返し、５番機が離陸して私は６番機です。３番機、５番機、６番機しか出撃できなかったんです。私の飛行機もすぐ知覧に不時着でしょ。老朽機であったことと８００キロ爆弾を抱えエンジンが耐えられなかったってことでしょうね。

知覧に不時着した私の飛行機は特攻には耐えられないってことで串良に持ってきて部品を取り外して飛べそうな飛行機に部品を提供することになり私の乗るべき飛行機は無くなったんです。菊水５号作戦は５月４日なんですけど私は飛行機が無いから見送りです。心境は複雑ですね。残る桜も散る桜って言葉がありますがやっぱり戦友が飛び立っていく後ろめたさと今日も生きているという複雑な気持ちなんです。いずれにしても次の作戦の時は命令が下ると行かねばならん覚悟もあるんですが今日も生きているという喜びもあるんです。

黒島に不時着

５月11日は97艦攻特攻の最後の出撃になったんです。要するになんとか稼働できる７機をそろえて最後の特攻作戦が行われたんです。宇佐空が一機、姫路空が三機、百里空が私をいれて三機、これで97艦攻の稼働可能機はないということで出撃したんです。７機のうち６機が不時着です。百里空の小田切君の一機だけが飛び立って後は種子島に三機ぐらいが不時着し、のこりは基地に帰ってきたのもあります。それで97艦攻の特攻は解散です。それで搭乗員は原隊に帰ったんです。私たちは黒島に不時着しましたが前田兵曹の電信が基地に届いてなくて私たちも戦死扱いになっていました。不時着の時と突入する時以外は電信を打ってはいけない約束になっていました。敵に傍受されるといけませんからね。

沖縄までの中間地点まで飛行したころエンジンの調子が悪くなり操縦の梅本兵曹が「エンジン不調！」というので私が「飛べるところまで飛ぼう」そう言いましたが高度が下がってきて「高度をとれ！」とは言いましたがだんだん下がっていくので高度７００で爆弾を捨てました。「どこかの島に不時着しよう！」１８０度方向転換して飛行し黒島近くの海に不時着しました。通信の前田兵曹は不時着の時、顔をぶつけて血まみれです。不時着水して一分ぐらい飛行機は浮いてましたのでその間に３人で海に飛び込みました。ライフジャケットを着てますから泳ぎにくいけど沈みません。黒島の赤鼻というところで釣り人の姿を見たので前田兵曹が「助けてくれ！」と言ったんですが海が時化てますから危険で飛び込めない。釣り人も「頑張れ！」しか言えないんです。やっとのことで赤鼻まで泳ぎ着いて助かりました。この時「助けてくれ！」と前田兵曹は言ったのですが戦後にこの話をすると「絶対に言ってない！」と言っています。命令を受けて出撃し愛機を海没させて自分たちは島にたどりついたんですから負い目があります。まさか７機出撃して１機しか突っ込んでいないなんて知りませんから自分たち以外の６機はみんな突っ込んだと思っていますから、自分だけ生き残った負い目でおりました。内地に帰ったあとで６機が不時着したことを知り、97艦攻での特攻は無理だったのかと思いました。宇佐空の隊長が97艦攻特攻は老朽機で使用に耐えられないと４月16日の段階でだしてるんです。我々の乗った97艦攻一号機なんて支那事変の頃の飛行機ですからね。７５０馬力ですよ。三号機で１０００馬力です。７５０

馬力に８００キロの爆弾を積んだんですが目一杯の搭載だから無理があるからエンジンが持たないですよ。

陸軍潜水艇で内地へ

この黒島にたどりついて先に陸軍の特攻隊として不時着していた柴田さんがいたんです。海軍と陸軍の違いはありますが戦後、柴田さんと黒島に助けられたんだから島に礼をしようと話しました。安部さんとは入れ違いで島の人から安部機が再出撃の時に柴田さんに薬を投下していった話も聞きましたが、はたしてそれが安部機であったかどうか。知覧には記録がないんですが島の人は安部機だと思っています。沖縄攻撃の進路であり、海軍なら串良と指宿、陸軍は知覧と万世の特攻基地からほとんどの機が黒島の上空を通っています。開聞岳すぎたら黒島ですから、そこを起点にどう飛ぶかということです。比較的に西に寄っていますから敵の遊撃機もまだ少ないと判断できますが、陸軍の場合はナビゲーターがいませんから操縦員だけだと進路を誤りますからどうしてもトカラ列島に沿って飛んでいくんだと思います。しかし沖縄に近づけばどこを飛んでも敵の邀撃機はいたしピケットライン張られてましたからね。

黒島には82日いました。島から海上を見ましても昼間は一艘の船も見られないんです。ということは、その辺にもアメリカの潜水艦がいて船が通ればドカンとやってるんです。内地からも南方からの石油、資源も全く入って来なくて制海権も制空権も米軍のものなんです。薄暮と黎明期に特攻機がブスンブスンと音を立てて南に下がっていく。それも一機、二機と単機です。昼間はアメリカの船舶連合の何百機が飛んで行ってまた編隊組んで帰っていく。そんな毎日です。昼間、米軍機に体をさらしますと必ず撃ってきます。米軍が上陸してきたときのために住民は山に隠れる準備をしていました。

7月17日に陸軍の潜水艇が入ってきました。その時に沖縄が陥落したと、今度は本土に敵が来るからこの島にもいつ敵が上陸してくるかもしれないと艇長の松岡中尉に言われました。この時半舷上陸で25人ぐらい乗ってるんですかね。半分が上陸して休養し、夜沖縄に向けて出て行きました。艇長もいつ帰れるかとは言わなかったですが私たちとしては柴田さんだけでも連れて帰って病院に入れたかったわけです。松岡中尉は「これから作戦があるから自分たちも生還できるかどうかわからない。でも話の趣旨は分かりました。帰れるようなら考慮しましょう」そう言って出撃して行きましたが、意外に早く30日に帰ってきました。我々の後に不時着した中村さんも含め、陸軍2名、海軍3名の特攻隊員を収容し内地に連れてきてくれました。

私は大里部落にいましたが２１４振武隊の中村さんはもう一つの片泊部落の前に落ちましたから私と村の方と手漕ぎで行って救出したんです。

内地に帰って来て柴田さんは大分の陸軍病院に入院したので彼は歩けるようになったんですね。それまでは足が火傷で曲がってたんです。

口之津の暁部隊の基地で歓迎を受けた後、佐世保の鎮守府へ行きましたら鹿屋の5航艦の司令部が大分に移ったから大分に行って報告しろと言われました。大分の指令部に報告しに行ったら串良の艦攻特攻が解散したと聞きました。次は本土決戦に備えて各部隊が作戦中だからすぐに百里に帰れと言われました。

百里原で終戦

百里に帰る途中広島を通りましたが一発の爆弾で何万人が死んだわけですからあの光景を見ると戦争がいかに罪悪かわかります。ただ、東日本大震災で原発事故がありましたけど、その大本である原爆についてマスコミは報道しなかったで

すね。これはいつか誰かが開発したでしょうけどパンドラの箱を開けたのはアメリカですから、すべての根源はアメリカの原爆開発から福島の原発事故につながっていくんですね。

百里に帰って袋田温泉に百里の保養所があって、そこに休暇をもらって３人で行っていました。温泉から帰ったらまた頼むぞということです。ここで終戦の詔勅を聞いてあわてて隊に戻ってきたんです。

帰ってきたばかりでしょ。あまり自分の頭を整理する時間もなかったし広島も見てきたし、そうしたら私と一緒に５月11日に出撃した須田君が種子島に不時着して先に百里に帰ってたんです。百里の97特攻は15機、45名が戦死してるんです。生き残ったのは６名です。「我々がこれからやらなきゃいけないのは97艦攻特攻で亡くなった45名に対する慰霊だ。これからは二人で協力して亡くなった戦友を弔おうじゃないか」そう言って別れました。それから手紙のやり取りぐらいはしていましたが終戦から２年ぐらいして彼は自殺しちゃったんですよ。彼は皇華隊にいて名古屋に行った時、機体が故障して百里に戻ってきた。そうしたら次の正気隊に入ったんです。特攻隊員になった者は抜けられないんですね。彼は４月28日４番機で離陸してすぐ、エンジンがもたないってことで戻ってきたんです。５月４日の時もエンジン故障で知覧に不時着して５月11日は種子島に不時着して帰って来てます。特攻で３回出撃して帰って来てるし、一回は名古屋で故障して帰って来てるし、すさまじい体験から戦後生きる気力を失ったんでしょうかね。

黒島を忘れない

私はその後、早稲田大学に復学しました。22年に柴田さんと中村さんがカンパしてくれまして「我々が世話になったんだから礼をしなきゃいけない。君は学生だから金は我々が出す。代表して行ってこい」ということで黒島に行きました。それから黒島との付き合いが続いています。　島の方は区長さんから警防団長から軍人を大事にしてくれました。島からもかなり出征してますから、そんな方にも影膳を出してる方々でしたからね。それに対して我々も応えてましたよ。島には警官もいませんし防空に対してどうしたらいいかとか島に敵が上陸したらどうするとか話が出たら我々も意見をしました。なにせ飢饉の様な島ですがその中で我々には貴重な食料を出してくれていましたからその恩義を感じているわけです。この再訪の時、黒島で柴田さんの世話をしてくれた日高シナさんに柴田さんから結婚の申し込みを託されましたが、シナさんは復員した島の青年と既に結婚されていました。

昭和50年代だと思うんですけど黒島の方々が東京見物に来たんです。私が世話になった警防団長、区長さんの奥さん、その娘のシナさんが来たんです。私たち夫婦と柴田さん夫妻と東京の料理屋さんで会食したんです。柴田さんの奥さんがシナさんに三つ指ついて「主人が黒島では大変お世話になりました。シナさんは命の恩人だと主人から聞かされております。どうもありがとうございました」そうお礼をされていました。なかなか劇的な状況でしたよ。柴田さんと相談して黒島で陸海軍の特攻隊の慰霊をしようじゃないかと平成16年から続いています。

戦後政治というのは戦前と全く違っていますので過去のことを話しても歴史的価値が違いますから無理だと思うんですけど、あの戦争がなぜ起きたのか客観的立場から、第一次大戦、第二次大戦がなぜ起きたのか学んでいただきたいと思います。今は現代史を習う機会が無いでしょう。大正デモクラシー後の日本と世界との関係をもう少し勉強していただきたい

とおもいます。理不尽な特攻作戦ですけどあえて国に殉じようとした若者たちの気持ちを少しでもわかっていただければと思います。

江名武彦少尉

インタビュー日時
平成24年6月16日

参考文献
特攻　最後の証言（アスペクト）
特攻　最後のインタビュー（ハート出版）

神風特別攻撃隊第４御楯隊
倉本宣男上等飛行兵曹
予科練乙18期

生まれも育ちも紀和町です。（現在の三重県熊野市紀和町）昔はここは入鹿村っていって、入鹿村と西山村、城仙村とが合併して紀和町になったんです。昔は尋常高等小学校っていって８年間勉強してね。16年12月に戦争が始まった時には17歳になってたから、ラジオなんか聞いて戦争だってわかりましたし、始まったと

鹿屋にて第四御楯隊のペア
後が倉本宣男偵察員。前列左壁屋正喜機長、右小河静夫操縦員

たん、国民総動員で若い男の人は徴用されて出て行ったですわね。こんなことじゃ、どうせ徴兵にとられるし、先に軍隊に行って、航空兵が一番マシじゃろうと思って飛行兵を志願して行ったんです。海軍って海の上って印象があったですが戦果を聞いてたら海軍のほうが華々しく報道してましたわね。陸軍はマニラとかシンガポール占領とか報道してましたが海軍ほどの派手さはなかったですね。だから海軍に志願しました。

松岡さんってお寺さんがあってそこの和尚さんと親父が鯉を飼っていて親しくしてました。そうしたら戦争が始まって和尚さんから「倉本さんよ、予科練っていうのかあるで」って話をいただいたので予科練を志願して入ったわけです。私の所は7人兄弟ですが男は私一人です。軍隊行くのは私だけ。17年の早々に熊野市の木之元って所で面接があって、今度は京都から岩国のほうに行って本格的に試験を受けました。岩国で2週間ほど適性検査をうけたんです。椅子に座って回されたり、大きなドームに入って回されたりとめまいとかなにやら、回された後に外にほり出されてまっすぐ歩かされたりしました。来た以上は受からにゃいかんと思ってどうにかこうにか受けました。岩国へはここから同期生と二人で行きましたが、その方は航空兵に受からなくて海軍のほうに行ったんですね。艦船にのって戦死しました。

私は予科練に17年の5月に土浦に行って、ここで兵隊としての基本訓練をやるわけです。霞ヶ浦で短艇訓練をやったり軍人精神を叩きこむための訓練です。ここに来て4カ月ぐらい経ったときに適性検査がありまして赤トンボの水上飛行機で適性を見られました。操縦志望だったのがどういうわけか偵察員に回されたんですね。飛行機を操縦するのが我々の使命だと思ってたんですけどね。その後三重航空隊へ17年10月頃、代わって予科練生活は1年7カ月ぐらいでした。予科練時代は楽させてもらったですね。土浦に行って2，3日したら花壇や宿舎周辺の世話する係にされて、三重空行っても、同じ係になって、同期のみんなが長い廊下を雑巾がけしてるのにわしは班長と花壇の世話してましたからね。休みの時は食べに行くのが楽しみでね。松阪に井村屋って戦争中でも生菓子つくってるところがあって、そこに食べに行ったりしてました。

機上通信兵として訓練

予科練を修了し大井航空隊へ行きました。ここは予科練より一つ上の飛練といって実施部隊に行く前の訓練です。３００人ぐらいおりましたかね。ここで偵察員としての訓練で通信なんかやるわけです。ここで飛行練習生として大井に行って初めて飛行機に乗って訓練を受けました。乗った飛行機は白菊です。兵舎に電信機が並べてあってトツー・トツーを覚えるんです。今でも覚えてますけどややこしかったですね。飛行機での訓練は爆撃照準機を覗いて爆弾投下訓練や飛行機が風で流されるので、それを測定したりの訓練ばかりでした。航空図を見て指示を出すようなことも仕事になってくるのですが、銀河に乗ってからは機長がベテランの方でしたので私は通信専門になりました。

大井での訓練を終えたら都城の実地部隊へ行くんですが私が一番最初に名前を呼ばれましたね。そうしたらみんなが「おおおー！」って。ここで名前を呼ばれたのは朝日野、和田、入戸野っていうのと私の4人です。ここは第4飛行隊といってここにいたのは一カ月か二カ月ぐらいでしたかね。ここで99艦爆や97艦攻で宙返りや背面飛行やらで気合入れられたですわ。その後、横須賀へ代わって第12飛行隊へ代わりました。ここでは彩雲

で偵察に出るって前提で訓練を受け取ったんです。通信は機上勤務で地上で送受信をしている通信兵とはまた別です。都城には一カ月半ぐらいしかいませんでした。それから横須賀海軍航空隊へ行って偵察第12飛行隊って所に代わったんです。ここで彩雲に乗って訓練受けました。

地上でモールスを打っている時と機上で打つときとでは感覚は違いますね。電信が入ってくるときがありますね。東京の大島あたりだと不感地帯といって通信が入って来ないんです。通信が強く入って着たり不感地帯で入って来なかったりします。地上では一定ですけどね。でも大井では地上との交信はしなかったと思います。機上の飛行機同士の通信訓練でした。地上との交信は実施部隊に行ってからです。

その後、木更津に配属になったんですが、彩雲に乗っていたらエンジンが止まって不時着する時に地上に不時着を知らせる交信をしました。この時連合艦隊用の７０３号電波を打ちました。連合艦隊専門の周波数ですからもちろん禁止なんですが、エンジン止まって墜落するってときですからね。偵察員の成田少尉が「電波転換！」って言ったけど自分の位置を伝えなきゃいけないからそれどころじゃない。浜田操縦士が「エンジンの調子が悪い」って何度か地上で調整して整備してやっと飛び立ったらエンジンが止まって墜落です。落ちるときは姿勢を低くして衝撃が少ないように構えてね。エンジン止まってもしばらく滑空できるんですけどね。

前は山で回りは田んぼだったですけど、墜落してエンジンは30メートルぐらい飛ばされました。胴体も飛ばされましたが３人とも無事でした。ガソリンに火が付いたものの田んぼですから大事には至りませんでした

基地からトラックで迎えに来てもらったけど「倉本、極秘電波使ったから銃殺刑だ！」なんていわれましたよ。でも基地に帰ってもこれといってなにもなかったですよ。「電波管制してるのに連合艦隊の電波うったのはお前だけだ」っていわれたぐらいです。これからしばらくして銀河に代わったんです。攻撃４０５飛行隊です。

第四御楯隊

攻撃４０５飛行隊が木更津で結成されてここに配属になったのは20年２月中頃だったと思うんですけどね。それで松島に代わったんです。実際に銀河に乗ったのは２月末頃だったと思います。松島に行って本格的な急降下爆撃なんかの訓練を受けたですね。銀河は３人乗りの飛行機ですがペアは常に同じです。３人で息を合わせなければいけませんからね。最後まで一緒でした。（冒頭の写真）昼夜を問わず急降下爆撃の訓練で高度３０００メートルぐらいから45度で突っ込んで「ヨーイ！テー！」で爆弾を投下して機体を引き起こす訓練ですが重い機体の飛行機ですから起こしきれずに海に突っ込んだ機体もありました。矢田久雄って私より一年半ぐらい早く入った人で南方でも戦った人ですが海に突っ込んで何もあがらなかったでしたね。御両親が松島まで来とったこともありましたけどね。

爆弾投下の合図は勘ですね。その時の状況によってですが高い所から急降下して爆弾を落とすときもあるし近いところで落とすときもあるし水平飛行で落とすときもあるしね。

特攻隊に編入されたのは２月の半ばから終わり頃ですね。昼夜を問わず急降下の訓練ばっかりでした。木更津で豊田副武大将がみんなに酒をふるまって、その時に短刀くれたんですわ。直接手渡されたわけではないけどね。大勢、２００人ぐらいおったと思いますが話の内容は覚えてないですね。最終的には「「頼むぞ」っ

て事だったと思います。木更津からトラック島にいって飛行機を整備し爆弾を積んでサイパン、テニアンのアメリカ艦隊を攻撃する部隊と園田直大尉（戦後、国会議員）を中心とした船で奇襲する部隊に二つがありました。でも船で行くと事前にわかってしまうので一式陸攻で行って攻撃をかける作戦になりました。私らが航空攻撃で敵の艦隊を叩いたあと、園田大尉らが一式陸攻で行って小型爆弾で飛行機を爆破するゲリラ戦をするはずでした。特攻出撃当日は近所の工員なんか見送りに来てくれてたんですが、いざ飛び立とうとしていたら整備が白旗を振って中止です。南鳥島とか中継の飛行場が爆撃にあって滑走路が使えないからですよ。５月頃でしたかね。木更津からは行けないから５月の７日でしたか鹿屋にいってそこから第４御楯隊として直接ウルシーに特攻です。この時の武装は８００キロ爆弾の羽根の部分を切った奴を２発、機銃は前に20ミリで私の所には13ミリがありました。鹿屋に移動する時、瀬戸内海上空で隊長の指示で試射したことがありました。鹿屋から沖ノ鳥島まで行ってそこで基地を確認して方向の確認です。南東の方角にそこから約２時間半でウルシーです。鹿屋を飛び立ってから機内で一切の会話はありませんでした。浮力が付かずに落ちて自爆した者から途中抜けたものからいまして24機整備して10機ぐらいが出たんですかね。最終的に７機ぐらいで沖の鳥島まで行ってそこを起点にあと３時間ぐらいでウルシーの敵の機動部隊までいくんでしたけど、沖ノ鳥島まで行ったら積乱雲がありましてね。その雲の中に入って乱気流で飛行機同士が接触したら危ないし、雷も鳴ってましたわ。だからバラバラに飛んで３機か４機ちらっと見えたですけど、これでは戦果は上がらんだろうと思いました。向こうではグラマンが飛んでるのはわかってますからね。３機４機ぐらいで特攻したところで戦果は上がらんだろうと。この時にも後ろからロッキードＰ38か何か、敵の飛行機が追尾しとったですね。だから沖ノ鳥島あたりで野口隊長機から発光信号が出て「再度やり直すから引き返す」って連絡が入りました。片方の耳は伝声管で機内と会話するため、もう一方の耳は電信機を聞いています。隊長機も近くを飛んでるし、長波を使えば普通に会話できるんです。「後ろ、Ｐ38きとるか？」って声がきこえました。壁屋機長からか野口隊長機からか今でもわかりません。機銃で応戦しろって事だったかもしれませんね。

海軍時代に使用していた双眼鏡と飛行帽

操縦は小河っちゅうて甲飛９期、鹿屋を出撃する時にみんなから送られてきてるから引き返せれんです。壁谷機長が「引き返すぞ！」っていってもいうことをきかんのです。終いには機長が「バカヤロー！」ってどなってしぶしぶ引き返したんです。

特攻は志願でないです。予科練入って何年もたつとるでしょう。攻撃に行って戦死したって話も聞いとるわけですから死ぬことは怖くなかったです。特攻出撃

の前に遺書かいとる人もおったようですが私は書かんかったですね。この時引き返して鹿屋でなく徳島に帰りました。電波出したらいかんですから鹿屋には連絡しとりません。壁屋さん、以前徳島にいたようで懐かしがってました。徳島から鹿屋に帰ったらワシら死んだことになってました。どこかに墜落したと思われとったんでしょうな。もっとも積乱雲がなかったら死んでたんですわな。

この時沖縄戦ですから鹿屋からは特攻も含め連日攻撃がでてました。何十発も被弾しながら帰ってくる機もおりましたな。私も1度、沖縄の敵艦隊を攻撃に行きましたが、空母から巡洋艦から駆逐艦、輸送船と隙間ないぐらいびっしりおるんです。まともに攻撃なんてできんですよ。夕方に攻撃に行ったんですが集中砲火がすごいんです。曳光弾がはいってますからどれだけ撃ってきてるかわかりますが、敵のど真ん中には行けませんよ。

鹿屋にいるときは敵の攻撃も受けました。その時は地上から機銃で応戦してましたよ。敵も時限爆弾なんか落としてきて3時間後なんかにドカンときたりしてました。

その後は鹿屋にいました。というのも壁屋さんが入院したからです。わしらの機長ですからペアが欠けると飛べんですからね。鹿屋におった時、宿舎は小学校をつかってましたな。基地には練習機やらなんやら何十機もあったんやがあくる日見たら一機もなかった。一日で特攻に出たんじゃろうかな。そんなこともありました。

私らは終戦間際に松島に帰ったですね。8月16日か17日、満月の日に木更津からサイパン、テニアンに特攻出撃だと聞いていました。壁屋さんが入院していますから小河さんと二人で松島まで乗って行きました。飛行機の中で「おい、松島はどっちだ」って会話したのを覚えていますよ。松島に到着したら復員っていうんですね。ですから今度は汽車に乗りっぱなしで帰ってきました。両国辺りまで来たら辺り一面焼け野原でした。こっちに帰って来て駅前の旅館にコメ2升をわたして泊めてもらいました。松島で復員する時にもらったものですがウチは百姓をしていますからコメはいらんからね。

終戦の時、何を思ったかと聞かれても、命長らえたとも思わなかったし、これで家に帰れるとも思わなかった。妻帯者ならいろいろ考えたでしょうがね。最後の階級は上等飛行兵曹でした。

倉本宣男上等飛行兵曹

インタビュー日時　令和4年10月24日

参考文献
特別攻撃隊の記録　海軍編　光人社

ト號空中勤務必携（2）
編集長　金子　敬志

(16)

堅確ナル意志ヲ保持セヨ	出撃命令ハ何時来ルカワカラス、何時デモ来イ、準備ガ未来テヰルカ、併シ好機ヲ待ツ間ガ非常ニ長イ場合モアル所謂待ツ身ノ辛ラサダ　此辛ラサニ負ケテハナラヌ又　負ケテ汚名ヲ残シタ者ハ同期ノ中ニナカツタカ	
愛機ヲ悲シマセルナ	愛機ニ人格ヲ見ル出来ル出来ルタケ傷ニ居テヤレ腹ガ減ツテハ力ナイカ性我ハシテ力ナイカ流レル汗ハ拭イテヤレ	
時来タラバ	自分バカリデハナク愛人ハ幾一モ現世ニ残ス未練ナク　アッサリ飛ビ立ツ心意気ヲ持タナケレバナラヌ又　立ツ鳥跡ヲ濁サズト謂フ	

(17)

攻撃実施	一	二	三
	発進順序	隊形進航	高度進航
	誘導機―間撹―直撹（敵襲顧慮ノ場合間撹発令スルコトガアル）(1)(2)(3)(4)	状況特ニ強襲ガ奇襲ガ又兵力敵情等ニ依ツテ異ルカ一例左図ノヨウデアル	攻撃要領及機種敵情攻撃ノ時機及天候気象等ニ依ツテ異ツタ強襲―高々度急速接敵奇襲―超低空接敵

堅(16)確なる意志を保持せよ

出撃命令は何時来るかわからぬまた何時でも来いの準備が出来ているか併し好機を待つ間が非常に長い場合もある

所謂待つ身の辛さだ　此の辛さに負けて（敵襲の顧慮ある場合間援先発することはならぬ）

◎負けて汚名を残した者は同期の中になかったか

愛機を悲しませるな

愛機に人格を見出せ

出来るだけ傍に居てやれ

腹が減っていないか

怪我はしていないか

流れる汗は拭いてやれ

時来れば

自分ばかりではなく愛人（機）も

現世に残す未練なくあっさり

飛び立つ心意気を持たねばならぬ

立つ鳥跡を濁さずと謂う

攻(17)撃実施

一　発進順序

①誘導機―間援↑直掩↑ト号

②

③

④

二　航進隊形

状況特に強襲か奇襲か又兵力敵情等に依って異なるが一例左図のようである

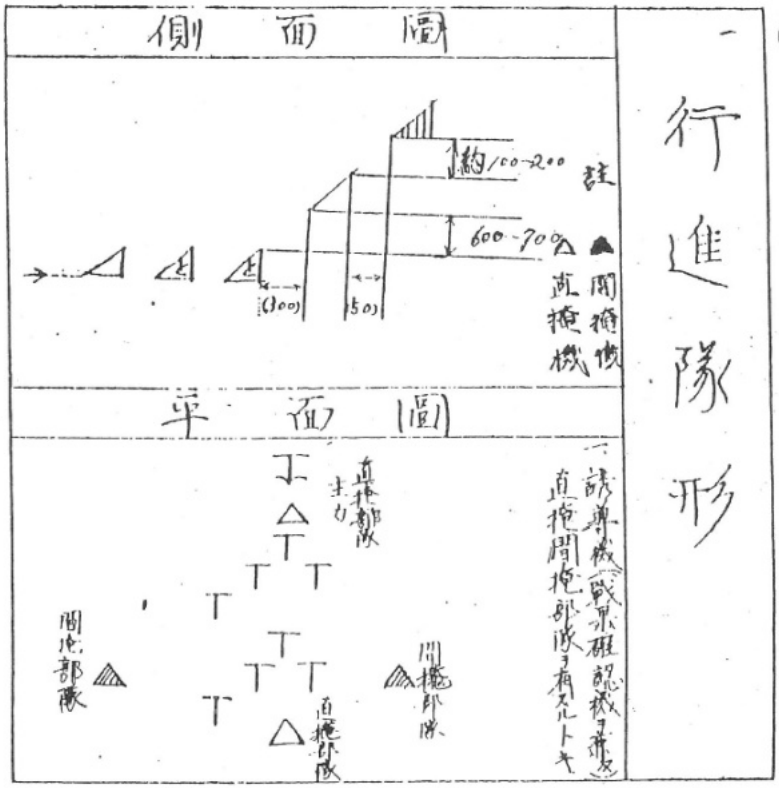
三　航進高度

攻撃要領及機種敵情攻撃の時機及天候気象等に依って違うが

強襲―高々度急速接敵

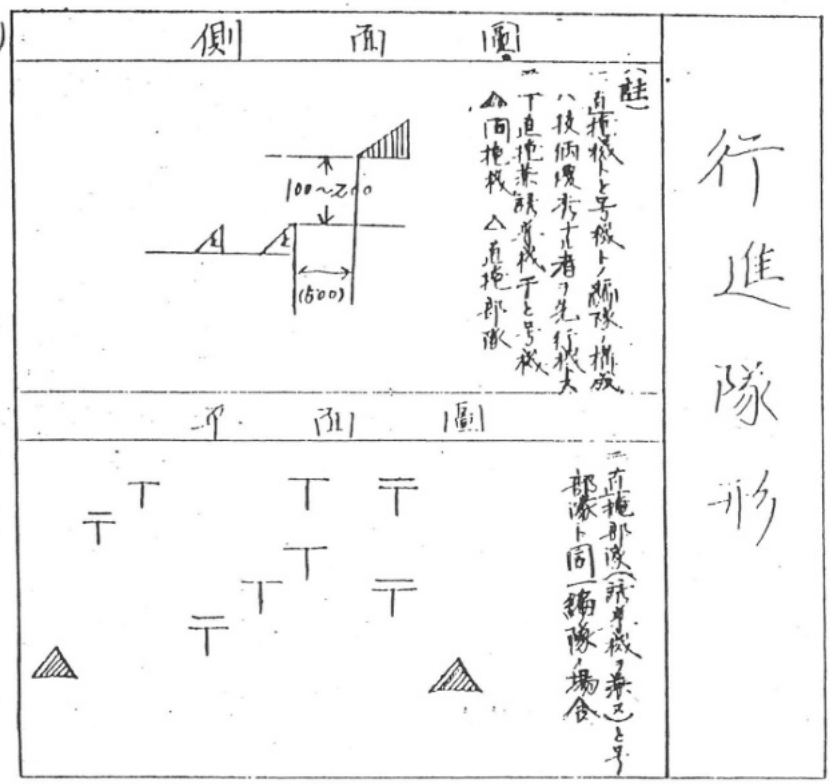
奇襲―超低空接敵

(18)



行進隊形

(19)

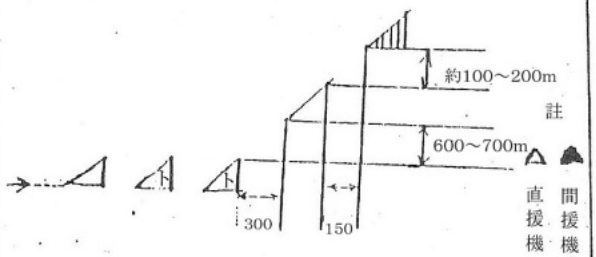


行進隊形

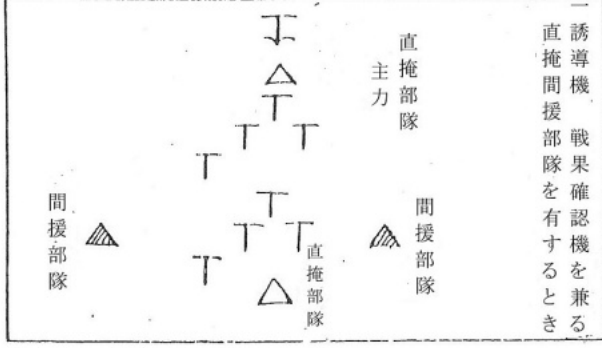
(18)

行進隊形

側面図



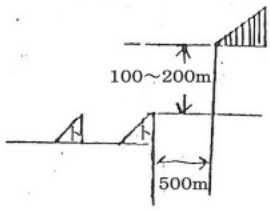
平面図



(19)

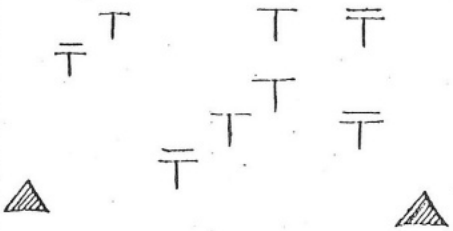
行進隊形

側面図



（註）
一 直掩機とト号機との編隊の構成は技量優秀なる者を先行機とす
直掩兼誘導機 ト号機
間援機 直掩部隊

平面図



二 直掩部隊 誘導機を兼る
ト号部隊と同一編隊の場合

連載 山ある記31 長野県「八方池」

会員 池田康博

山と、その山を逆さに映す池の絵には、格別の美しさがあるが、そんな光景が見たくて、八方池まで出かけた。

八方池は、唐松岳に至る八方尾根と呼ばれる稜線上の中腹にあり、標高は二、〇六〇ｍ。白馬八方尾根スキー場のリフトを乗り継いで、終点となる八方池山荘から歩くのが最も楽なコースである。

朝の９時30分に黒菱リフトの駐車場に到着、ここからリフト２本を乗り継いで、八方池山荘に着いたのが10時５分であった。標高は一、八二〇ｍ。ここからは登山道コースと木道コースが左右に分かれている。登山道は稜線を登っていくが、木道コースはその斜面に作った道で、歩きやすいように整備してあり、二、〇〇五ｍの第２ケルンで登山道と合流している。

楽な道を、ということで、木道コースを選んだが、この日は、体育の日で、三連休の最終日ということもあり、「富士山でもここまでは・・、」と言う程の人出であった。時々上を見上げながらゆっくり進んでゆくが、唐松岳の山頂部や、荒々しい「不帰ノ嶮（かえらずのけん）」が少し望めて、期待を持たせてくれる。第２ケルンで登山道と合流し、稜線に出たところで、眼前に、唐松岳の山頂部から不帰ノ嶮、天狗の頭（かしら）に、白馬鑓ヶ岳、杓子岳、白馬岳の白馬三山が眼前に現れた。その雄大な景色に感激し、立ち止まっては写真を撮りながら登っていった。

不帰ノ嶮（奥左からⅠ峰、Ⅱ峰、Ⅲ峰）

11時10分に八方池ケルンを通過、少し登って第３ケルンを経由して、眼下の八方池まで下りて行った。八方池到着は11時20分であった。

八方池は、一周五分もかからないような、茶色く濁った小さな池であった。些か、期待外れな気持ちで池の縁を歩いていたところ、池越しに山を正面にとらえる場所に来た時、たまたまベンチが空いて座ることが出来た。すると、丁度、この頃から雲が切れ、空がスッキリと青くなってきた。

八方池も、その空が映って、きれいな青い池に変わり、「逆さ白馬」も撮ることができた。この間に昼食も摂っていたのだが、絶景を堪能しながらの贅沢な時間であった。

八方池と逆さ白馬三山

12時10分に下山開始、池を巡り、紅葉も楽しみ、迫力の連峰を堪能しながらゆっくり下り、第２ケルンからは登山道を歩いて、八方池山荘に着いた時は13時丁度であった。

ラッキーだったのは、黒菱リフトでは、空は厚い雲で、山も全く見えなかったが、昼前には快晴になったこと。また、第３ケルン付近で、アルプホルンを演奏している人がいて、アルプスの気分が味わえたこと。悔いが残ったのは、最初から登山道コースをとらなかったこと。絶景を目の前に見ながら登れたのにと思った。

（令和６年10月14日）

顕彰譜（16）

会報１３４号から始めた特別攻撃隊全史第二版の顕彰譜のご紹介第十六回目です。

特潜

特潜四勇士慰霊碑（マダガスカル）

昭和17年5月30日、帝国海軍の特殊潜航艇２艇（イ16潜、イ20潜搭載）が、ディエゴ・スアレス湾に侵攻しイギリス海軍の戦艦ラミーズを大破、タンカー、ブリティッシュ・ロイヤルティー号を撃沈した。攻撃終了後１艇は湾外に脱出し、味方潜水艦との会合地点に向かう途中、座礁し、乗組員２名は陸路会合点に移動中、イギリス軍と交戦戦死した。当初その地点に昭和51年11月10日に慰霊碑が日本大使館により建立されたが、交通の便も不便であり、４勇士を慰霊すべきという考えに地元も賛同協力し、平成９年５月にディエゴ・スアレス湾を見下ろす現在地に慰霊碑が建立された。その後、日本国大使館主催で、マダガスカル海軍の協力のもと、慰霊祭が執り行われている。

建　立　平成９年５月

建立者　日本国大使館

潜水艦 殉国碑（東郷神社内）

碑文（側碑）

潜水艦勇士に捧ぐ

太平洋戦争中百二十余隻の潜水艦と共に戦没された二万余人の乗員諸君　特殊潜航艇及び回天決死隊諸君　また諸公試演練に殉難された諸君諸君の遺骨は海底深く沈んで　之を回収する途がない　しかしそれは国難に赴いた諸君の忠誠が　そのまま其戦場に在ることを　意味する　民族の急を救うべく戦った犠牲の精神は　永えに其処に活きている

残された潜水艦関係の吾等は　個人と法人と併せて幾千　常に諸君の英霊の座する海底を見つめている　願わくは日本国民の全部も　ありし日の諸君の勇姿と　奮戦激闘の光景と　護国の屍となった戦場とを緬想して　敬弔の誠を伸ぶると共に　祖国再興の心の糧とすることを祈願して已まない

茲に曽ての戦友潜水艦建造関係者外有志一同相計り
小碑を東郷神社の霊域に建立して
諸君不滅の忠魂に捧ぐ
昭和三十三年五月二十五日

所在地　東京都渋谷区神宮前東郷神社境内
交　通　山手線　原宿駅下車徒歩５分
建　立　昭和32年５月25日
守護団体　東郷神社

回天

大津島基地
回天碑

碑文（側碑）

大東亜戦争　年ヲカサネテ苛烈ヲ加ヘ　物量漸ク乏シキヲ告ゲテ　前途暗澹タリシ時　愛国ノ至誠　弱冠ニシテ早クモ危急ヲ豫感シ　忠孝ノ純情　一身ヲ献ジテ狂瀾ヲ既倒ニ回サントシ　前代未聞ノ兵器　必死必勝ノ戦法ヲ創案シテ　従容自ラ之ヲ操縦遂行セシモノ　即チ是レ回天ノ勇士ナリ　惜シイ哉時既ニオソク　戦勢ヲ一転セシムルニ至ラザリシト雖モ事敵ノ意表ニ出デテ其心膽ヲ寒カラシメ　ヨク皇国ノ命脈ヲ危殆ノ中ニ護持セシモノ　其ノ功偉ナリト言フベシ　ココニ回天献身ノ勇士ノ氏名ヲ録シ　以テ芳ヲ千秋ニ伝フ

昭和20年終戦直後、回天特攻隊大津島分遣隊で、戦没搭乗員の慰霊碑建設を思い立ち、占領軍の許可を貰い、大津島村民の協力を得て、11月10日、搭乗員宿舎の前に慰霊碑が完成した。その後この慰霊碑は、戦後の混乱の中に跡形もなく破壊された。

地元徳山では、年とともに回天顕彰の気運が高まり、33年2月、回天碑の再建が提案された。33年11月8日、大津島における第4回慰霊祭当日、旧回天碑の一部が会場で発見され、11月22日、地元有志の協力を得て堀り出した。34年1月、回天碑再建の具体的募金運動が始まった。

碑の「回天」の文字は、回天創始者黒木少佐の遺文の中から選ぶこととなった。

回天が初めて米軍を攻撃した19年11月20日から丁度15年目の、35年11月20日、新しい回天碑が、大津島の旧宿舎前に、旧回天碑を神霊として埋没したその上に建設され、翌36年3月26日、除幕式が挙行された。

37年7月、回天顕彰会が発足、遺品の収集を始めるとともに、記念館の建設を目指し、40年秋、募金等を開始した。

43年1月、地元徳山に回天記念館建設賛助会が設立された。そして43年11月20日、回天碑に隣接して回天記念館が竣工した。

その後毎年11月第2日曜日に慰霊祭が取り行われている。

所在地　山口県周南市大字大津島字馬島

交　通　徳山より定期便で約30分

建　立　昭和36年3月26日

守護団体　回天顕彰会

回　天

光基地
慰　霊　碑

由来記

この碑は、昭和20年8月14日の空襲によって殉職した、旧海軍工廠職員、動員学徒738人ならびに人間魚雷回天特別攻撃隊員の、尊い犠牲を追悼して建立した。

昭和20年7月24日、光市沖における対空戦により、惜しくも祖国に殉じた旧海軍駆逐艦「樺」及び「萩」の乗員38人の御霊を追悼し、ここに合祀した。

光市民は、この地に永眠したこれら殉難者の霊やすかれと祈るとともに、世界の恒久平和を願うものである。

光市

所在地　山口県光市　市役所隣
武田薬品工業株式会社前

建　立　昭和35年

守護団体　光回天の会

特攻文芸

●あの世から　皆の幸福祈るとぞ
　手紙を残し　君は飛び征く
　　淳子

●海空に　去り征く君よ　花と咲け
　　淳

●幼子が　逃げ水追って　走ってく

●夏空に　入道雲が　丈比べ
　　ネコ

短歌・俳句・川柳の部

●逃げ水も　蒸発しそう　この暑さ

●三十度　楽と思うぞ　この頃は
　　ネコ

事務局からの報告等

一　第七十四回特攻平和観音年次法要の斎行について

恒例の特攻平和観音年次法要が令和七年九月二十三日（火曜・秋分の日）の午後２時から世田谷山観音寺特攻観音堂において、駒繋神社との神仏習合により斎行されます。

この年次法要の詳細に関しましては、同封の「年次法要のご案内」に記載しておりますので、会員以外の方も多くの皆様方、お誘い合わせの上、ご参列賜りますようご案内申し上げます。

なお、本年次法要に参列を希望される方は、同封の「郵便払込取扱票」の出席欄に○印を付し、お布施（一名分三千円）をお払込みください。

知人等同伴される場合は、同伴者のお名前もご記入ください。

二　「靖國カレンダー」の斡旋

今年度も、「英霊にこたえる会」が作成する「靖國カレンダー」を斡旋致します。来年のカレンダーは同封のチラシをご覧下さい。

ご希望の方は、内容をご確認の上、郵便払込取扱票に、必要部数及び金額（送料込み）を記載して申し込んでください。

ただし、発送は「英霊にこたえる会」からとなりますので、同会の都合により、お待ち頂く場合がありますのでご了承下さい。

三　会費納入のお願い

令和７年６月末現在、会費の納入状況は約60％です。

未納の方には、恐れいりますが、会費納入のお願いと振込用紙をお送りさせて頂きます。ご協力の程、宜しくお願い致します。

なお、行き違いにて既にご送金いただいている場合は、あしからずご容赦ください。

四　会報記事の訂正について

・会報一五三号（令和７年１月号）
　１頁及び５頁
　誤　靖國神社宮司　大塚海男
　正　靖國神社宮司　大塚海夫

五　寄付者御芳名（敬称略）

（令和７年４月１日～６月30日）

（単位千円）

三〇〇　御船　滋
一〇　卜部　桜子
七　幸野　聖子
七　山本　正之
五　岩本　幸二
四　岩浅　博之
三　岡本　浩史
三　岡本　芙美子
二　岡部　尚子
二　水町　博勝
二　城ヶ端　専
二　澤田　江里子
二　中島　尚史
二　中田　晃文
二　牧　重勝
二　正本　禎亮
二　高橋　芳幸
二　大森　和弘
二　波部　修三
二　星加　京子
二　神谷　浩
一　梶原　武
一　永富　康修
一　森　充
一　長谷川　昭

六　新入会員名簿（敬称略）

（令和７年４月１日～６月30日）

北海道　寺嶋　誠也
埼玉　岡谷　貢
東京　朝雲新聞社
長谷川　昭
石井　健三
イサ　由紀
飯尾　紀直

東京　卜部　桜子
兼村　博之
飯島　昌宣
飯島　晃太
飯島　準
飯島　健
神奈川　神谷　浩
大谷　眞智子
三重　岩本　幸二
兵庫　山本　正之
鹿児島　古閑　潔

七　会員訃報（敬称略）

ご冥福をお祈りします。

山形　三浦　守（7・3・1）
千葉　岩田　司朗（7・3・14）
東京　山本　裕士（7・2・22）
神奈川　中島　省治（7・3・30）

会員ご入会のご案内

「特攻隊戦没者に感謝と敬意を」

当顕彰会は、先の大戦の末期、一つしかない命を、祖国の安泰と家族や大切な人のために捧げられた特攻隊員に対し「あなた達のことは忘れません。有難うございます。感謝します。私たちも努力します。どうぞ安らかに！」を胸に、慰霊・顕彰を行う団体です。これにご賛同して頂ける方ならどなたでも会員にお迎えいたします。多くの皆様のご入会をお待ちしております。

○当顕彰会の主な事業

・特攻隊戦没者の慰霊顕彰（他団体への参加を含む）

・会報の発行等による特攻及び戦没者の伝承等

・特攻に関する資料の収集、調査、図書等の貸出講演会等の開催その他

・全国護國神社への特攻像の奉納・建立

○年会費

・一般会員　３０００円

・学生会員　１０００円

○　URL:https://tokkotai.or.jp
　ＱＲコード

ご投稿についてのお願い

ご投稿に際しては、次の点にご留意くださるようお願い致します。

1　原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。可能ならば、ワードファイル、又はテキストファイルで頂ければ幸いです。ＰＤＦファイルは編集の都合上、お受けできません。

2　記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当顕彰会にお任せ願います。

3　投稿記事に関する写真がありましたら、なるべく添付して下さい。

4　原稿、写真等は、原則としてお返し致しませんが、必要な場合はその旨お書き添え下さい。

5　会員以外の方の投稿も歓迎致します。

6、投稿記事等の送付先は、左記宛てとして下さい。

〒１０２-００７２
東京都千代田区飯田橋一丁目５―７
東専堂ビル２階
公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会
電　話０３-５２１３-４５９４
ＦＡＸ０３-５２１３-４５９６
E-mail　jimukyoku@tokkotai.or.jp